

2015 年度 公益信託 神戸まちづくり六甲アイランド基金助成事業 報告書

# ベトナム難民一世・二世たちの震災の記憶

阪神・淡路大震災から 20 年を迎えて

# 目次

---

はじめに	…… 2
<hr/>	
日本と神戸におけるベトナム難民の概況	…… 3
<hr/>	
年表：ベトナム難民の日本への受け入れと阪神大震災前後の出来事	…… 4
被災地域の地図	…… 5
<hr/>	
第1部 一世たちの記憶	…… 6
<hr/>	
I 復興への助け：自分・家族・行政、そして「しゃーない」	…… 7
II フックさんの震災体験：長期テント生活からの自力での生活再建	…… 9
III 被災時における就業の重要さ	
：震災後に結婚、起業を実現した呼び寄せ男性の生活史	…… 11
IV ことばの重要性：ベトナム料理店を経営する女性の経験から	…… 14
V ハンさんの震災の記憶	
：被害のない地域に逃れ、ベトナムという避難先を持っていた幸せと罪悪感の狭間	…… 16
VI 震災によって獲得したベトナム人としての誇り	
：思春期にベトナム難民として来日した女性の生活史	…… 21
VII ベトナム人としてのアイデンティティの再構築：震災をきっかけに	…… 24
<hr/>	
第2部 二世たちの震災の記憶	…… 28
<hr/>	
I 小学生だった頃の震災経験：ベトナム難民二世として生きること	…… 29
II 「がんばろう、神戸」という言葉との距離	…… 31
III 家族と過ごした特別な時間：子ども時代の震災経験	…… 32
IV 公園で暮らすという非日常にからみた「被災」生活	…… 34
<hr/>	
補論：東日本大震災の支援活動に参加したベトナム難民たち	…… 37
<hr/>	
おわりに	…… 39
<hr/>	
執筆者プロフィール	…… 40
<hr/>	

## はじめに

---

40年前の1975年5月11日、千葉港に9人のベトナム難民が上陸した。この出来事は、日本に初めてベトナム難民が上陸したケースであった。その後、日本政府は1981年に難民条約に加入し、1982年から本格的にベトナム難民の受け入れを開始した。難民問題が終息した現在も、結婚、家族呼び寄せによりベトナム本国からの人の移動があり、日本のベトナム人コミュニティの規模は徐々に大きくなりつつある。

ベトナム難民にとって、40年という年月は決して平穏なものではなかったと予想される。政府や宗教団体、そして市民活動団体は、ベトナム難民に対してサポート体制を整えたが、まったく言葉がわからないベトナム難民にとって、日本で生活基盤の確保は困難を極めたに違いない。とりわけ、関西圏に居住するベトナム難民は、1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けたことにより、ようやく安定し始めた生活基盤を揺るがされることとなった。

被災したベトナム難民に、様々な方面から支援の手が差し伸べられた。その一方で、被災ベトナム難民は、外国人差別、言葉の壁によって必要な情報を入手することが難しいという現実と直面した。日本にベトナム難民が上陸してから20年が経過してもなお、彼らは依然として不利益な立場に置かれていたことが、震災によって顕在化したのである。一部のベトナム難民は、日本人と力を合わせて自分たちの手で状況を改善していこうと、「ベトナム夢 KOBE」の前身である「被災ベトナム人連絡協議会」を立ち上げた。その後、ニーズに沿って活動内容を見直し現在に至っている。このような活動は、多文化共生社会の実現に向けた大きなうねりとなっているといえよう。

ところで、ベトナム難民は、着実に日本という社会に根をおろしている生活者である。しかしながら、生活者として日々の生活の延長上に被災という経験があり、そして日々の生活の中で生活を再建していった姿は十分に提示されてこなかったのではないだろうか。

被災したベトナム難民は、何もできず立ち尽くしていただけても、ただ支援の手を待っていただけでもない。彼らは家族や近隣の人たちと力を合わせ、生活の再建に努めてきた。そういった生活者としてのベトナム難民の被災経験の語りに耳を傾け、記録として残していくことが、「多文化共生」社会のあり様を考えていくうえで重要なのではないだろうか。

本報告書の作成は、多くの方々のご理解ご協力がなければ実現できなかった。本事業の趣旨をご理解くださった公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金関係者のみなさま、調査に協力し、執筆してくださった協力者の方々にも感謝申し上げます。そして、つらい出来事を思い出しながら、詳細に語るという作業を引き受けてくださったベトナム難民一世および二世の方々に、心から感謝申し上げます。

なお、文中に記載されている人物名については、プライバシー保護の観点からすべて仮名とした。

(野上 恵美)

# 日本と神戸におけるベトナム難民の概況

## 1. 日本におけるベトナム難民の概況

1975年にサイゴンが陥落し、その前後から難民（ベトナム難民）が発生した。彼らの多くは周辺諸国などに避難したが、日本にも一部のベトナム難民が到着した。日本政府は、当初一時滞在のみを許可していたが、1978年からはベトナム難民を中心とするインドシナ難民（ベトナム・ラオス・カンボジアからの難民）の定住を認めるようになり、2005年12月末（定住受入制度終了）までの間に、11,319人の定住を認めた。

この間日本政府は、外務省の外郭団体に委託して「姫路定住促進センター」（兵庫県姫路市）、「大和定住促進センター」（神奈川県大和市）、「国際救援センター」（東京都品川区）を設置し、ベトナム難民に対し日本語や日本での生活方法に関する教育及び就職支援等をおこなった。仕事や住居が決まったベトナム難民は地域社会での生活を開始した。

一部のベトナム難民は帰国したが、現在でも関西地方及び関東地方を中心とする日本全国で生活している。

（荻野 剛史）

## 2. 神戸の在日ベトナム人の概況

2016年1月現在、神戸市には、3,782人のベトナム人が居住している。そのうち1,231人が長田区に居住しており、長田区は神戸市で最も多くのベトナム人が居住する区となっている。神戸市のとりわけ長田区に多くのベトナム人が居住するようになった経緯として、地場産業としてのケミカルシューズ産業の存在が指摘されている。

1975年以降、インドシナ難民が国外脱出を図る中で、日本政府も難民受け入れに着手しはじめた。その一環として、1979年に兵庫県姫路市にインドシナ難民を受け入れる施設として「姫路定住促進センター」を設立した（現在は閉鎖）。このセンターでは、インドシナ難民のうち主にベトナム難民を受け入れ、彼らに日本語教育および生活訓練を実施した。訓練期間を終えたベトナム難民は、本格的な定住生活を開始することになる。

定住生活を開始する際、ベトナム難民は、センターから就職先の斡旋を受けていた。そのため、長田区を含む姫路市近郊の地域で定住生活を開始する傾向が高かった。ただし、長田区に多くのベトナム難民が移住した理由には、それ以外の理由があったといわれている。

ベトナム難民が長田区に集住するようになった理由のひとつとして、地場産業であるケミカルシューズ産業の存在が挙げられる。ベトナム難民が定住生活を開始した1980年当時、ケミカルシューズ産業は好景気の波に乗っていた。たとえば、あるベトナム難民女性の話によると、当時、四国でジーンズの縫製の仕事が時給300円だったところ、ケミカルシューズ工場の仕事で支払われる時給は650円だったという。そういったことが口コミで広がり、次々とベトナム難民が長田区に住まいを移すようになったという。震災前のデータによると、長田区に居住するベトナム人のおよそ6割がケミカルシューズに関連する仕事に就いていたといわれている。

もうひとつの理由は、震災時に救援基地にもなったカトリック教会の存在が挙げられる。ベトナム難民のうち、およそ3割がカトリック信者であるといわれている。人数的には決して多くはないが、彼らの生活は信仰と密接に関わっている。

ベトナムにおいて、カトリック信者はカトリック教会の近くに構え、一日何度もミサに与るために教会に足を運ぶ。家の中で人が集まるスペースには、キリスト像やマリア像がまつられており、カトリック信者は常に神とともに生活している。

このような背景を踏まえ、カトリック信者であるベトナム難民にとって、住まいと仕事場、そして信仰の場が密接しているということは、生活にとって重要な要素だったのだろう。長田区という場所は、ベトナム難民にとって故郷での生活を再現できる場所だったのかもしれない。

現在、長田区のベトナム人の人口は増加の一途をたどっている。さらには、来日背景は多様化しており、来日理由は、結婚、就労、留学等、さまざまである。また、近年では、兵庫県だけでも3ヶ所にベトナム寺院が存在し、仏教徒の活動も活発化している。

(野上 恵美)

年表：ベトナム難民の日本への受け入れと阪神大震災前後の出来事

	ベトナム難民に関する動向		調査協力者の来日・離日
	日本の動き	神戸の動き	
1970年代	<ul style="list-style-type: none"> <li>サイゴン崩落 (1975)</li> <li>ボートピープルの日本初上陸 (1975)</li> <li>定住許可 (1978)</li> <li>姫路定住促進センター開所 (1979)</li> <li>国際人権規約に日本が批准 (1979)</li> </ul>		
1980年代 前半	<ul style="list-style-type: none"> <li>大和定住促進センター開所 (1980)</li> <li>難民条約に日本が加入 (1981)</li> <li>国際救援センター開所 (1983)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>ハンさん来日</li> <li>グエンさん、フックさん、ランさん、ワンさん来日</li> <li>マイさん生まれる</li> <li>カイさん生まれる</li> </ul>
後半			<ul style="list-style-type: none"> <li>ホアさん生まれる</li> <li>タンさん生まれる</li> </ul>
1990年代 前半			<ul style="list-style-type: none"> <li>クオンさん来日</li> <li>リエンさん来日</li> </ul>
後半	<ul style="list-style-type: none"> <li>姫路定住促進センター閉所 (1996)</li> <li>大和定住促進センター閉所 (1998)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>阪神・淡路大震災発生 (1995)</li> <li>姫路定住促進センターが被災者を一時的に受け入れ (1995)</li> <li>「鷹取教会救援基地」発足 (1995)</li> <li>「兵庫県定住外国人センター」、「被災ベトナム人救援連絡会」が設立 (1995)</li> <li>多言語放送「FM わいわい」設立 (1995)</li> <li>鷹取教会救援基地から「たかとり救援基地」へ改称 (1997)</li> <li>「神戸定住外国人センター」が設立 (1997)</li> </ul>	
2000年代 前半		<ul style="list-style-type: none"> <li>特定非営利活動法人格「たかとりコミュニティセンター」設立</li> <li>すべての仮設住宅入居世帯の恒久住宅などへの移転が完了 (2000)</li> <li>NGOベトナム in KOBE発足 (2001)</li> </ul>	
後半	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際救援センター閉所 (2006)</li> </ul>		
2010年 以降		<ul style="list-style-type: none"> <li>「NGOベトナム in KOBE」から「ベトナム夢 KOBE」へ改称 (2013)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ホアさんベトナムへ (2011)</li> <li>カイさん、マイさんベトナムへ (2014)</li> </ul>

(特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター編「たきび たかとり10年誌——ともに生きるまちづくりのあゆみ」、2005年をもとに瀬戸徐が作成。)

被災地域の地図（神戸市長田区を中心に）

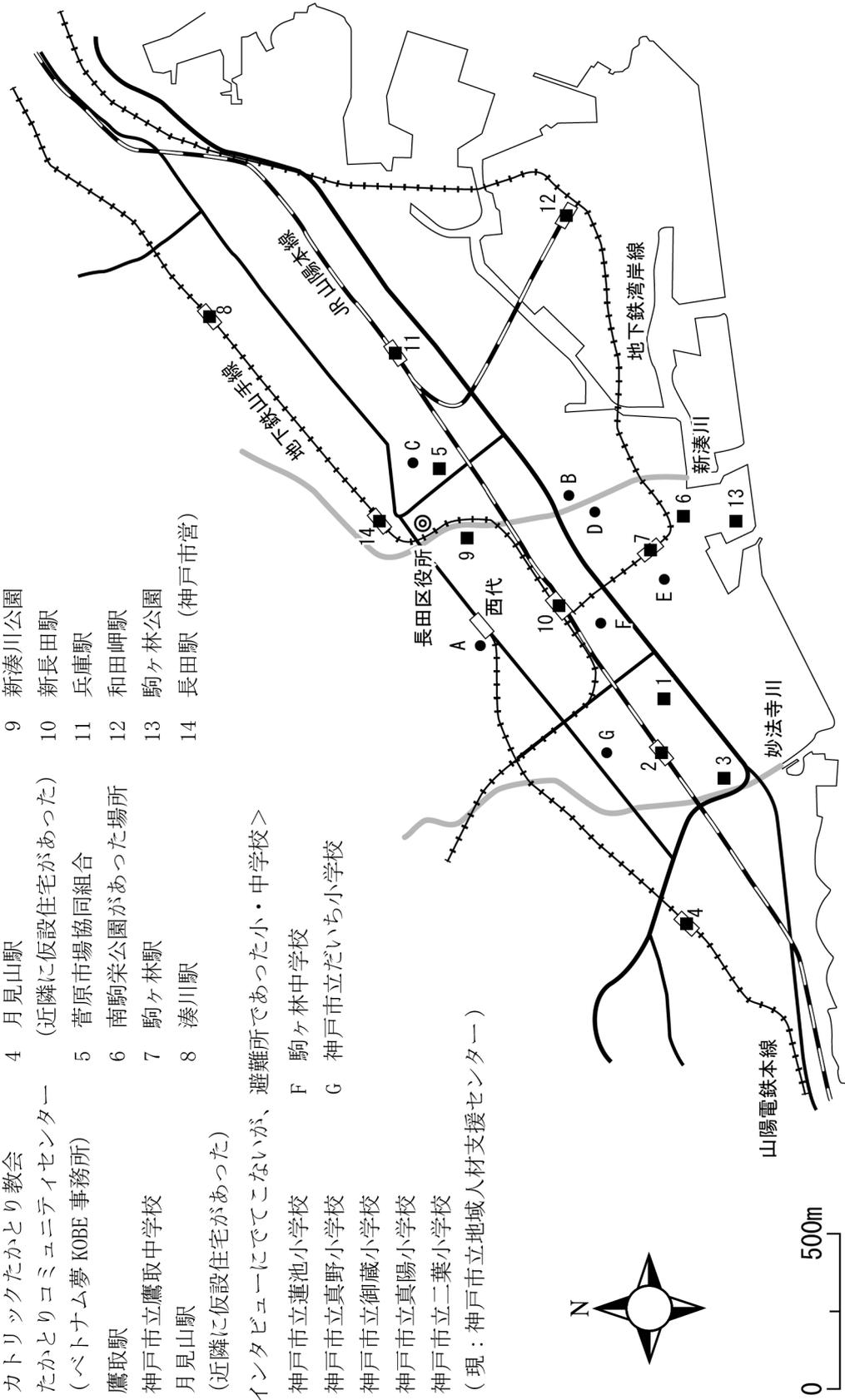
<インタビューにでてくる地点と主要駅>

- |   |                                       |   |             |    |            |
|---|---------------------------------------|---|-------------|----|------------|
| 1 | カトリックたかとり教会                           | 4 | 月見山駅        | 9  | 新湊川公園      |
|   | たかとりコミュニケーションセンター<br>(ベトナム夢 KOBE 事務所) | 5 | 菅原市場協同組合    | 10 | 新長田駅       |
| 2 | 鷹取駅                                   | 6 | 南駒栄公園があった場所 | 11 | 兵庫駅        |
| 3 | 神戸市立鷹取中学校                             | 7 | 駒ヶ林駅        | 12 | 和田岬駅       |
| 4 | 月見山駅<br>(近隣に仮設住宅があった)                 | 8 | 湊川駅         | 13 | 駒ヶ林公園      |
|   |                                       |   |             | 14 | 長田駅 (神戸市営) |

<インタビューにでてこないが、避難所であった小・中学校>

- |   |           |   |             |
|---|-----------|---|-------------|
| A | 神戸市立蓮池小学校 | F | 駒ヶ林中学校      |
| B | 神戸市立真野小学校 | G | 神戸市立だいいち小学校 |
| C | 神戸市立御蔵小学校 |   |             |
| D | 神戸市立真陽小学校 |   |             |
| E | 神戸市立二葉小学校 |   |             |

(現：神戸市立地域人材支援センター)



この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を利用して作成しています。

## 第1部 一世たちの記憶

ベトナム難民一世といっても、一括りにすることは難しく、多様な人びとで構成されている。来日当時、すでに成人していた者、家族を持っていた者、乳飲み子だったためボートに乗って来日した記憶がない者など、来日年齢に注目しただけでも、大きな幅を持つ集団であることがわかる。

ベトナム難民一世が多様性を持った集団であるということを念頭に置きつつ、ひとりひとりの語りにじっくり耳を傾けることにより、人によって被災経験の感じ方が異なっていることがみえてくる。

ある者は、目の前に広がる荒廃した町の様子を肅々と受け止め、家族のために安全確保を第一に行動し、ある者は、同じく家族のために一早く仕事に戻ろうとした。家族を支える立場であった者たちの語りからは、一日も早く日常を取り戻そうと奔走している様子がみえてきた。

震災時、10代であった女性は、時間の経過とともに自分が生き残ったことへの意味を考えるようになったという。彼女は、震災から20年が経過した現在も、答えを出すことができず苦しくなることもあるというが、今、生かされていることに感謝し、必死に生きようとしている。

震災がベトナム難民一世にもたらしたものとは何であろうか。震災という非日常性は、学校で自分は「ベトナム人」であることを隠してきた者にとって、自分がベトナム人であることと向き合わざるを得ない状況をもたらした。常に自分たちは何人であるかということに悩み続けてきたベトナム難民一世の中には、震災という経験は自分たちのルーツを受け入れる契機となった。

震災は、ベトナム難民一世に苦難だけをもたらしたわけではない。それまで培ってきた経験を発揮し、家族を守り抜き、生活を再建させたことは、ベトナム難民一世にとってその後の人生の糧となったであろう。ひとりひとり、震災経験の受け止め方は異なるが、それぞれの語りからは、生き続けることの尊さ、生き直すための希望を見いだすことができる。

(野上 恵美)



写真1 カトリックたかとり教会 (1995年1月撮影)

提供：神戸市

# 1 復興への助け：自分・家族・行政、そして「しゃーない」

## 1. はじめに<sup>1</sup>

グエンさん（仮名）は「1938年」生まれの77歳（インタビュー実施時）の男性である。「1938年」とあえて「」を付したのは、これが徴兵から逃れるために「用いた」生年だからである。

グエンさんはベトナム、北部ニンビン省で幼少期を過ごした。その後1952年における南北ベトナムの分割時に、迫害を避けるためにホーチミンシティ（旧サイゴン）に移住し、1980年代前半に家族とともにベトナムを船で脱出した。海上で救助され、シンガポールを経由して徳島に到着、「日本人と顔が似ているから」という理由で、日本での定住を選択した。上陸許可を受けた後に、長崎県にある日本赤十字社の一時保護施設「日赤ベトナム難民救護施設大瀬戸寮」に2年ほど入所した。その後、難民事業本部が運営する「姫路定住促進センター」（以下、センターと表記）に入所し、センターで紹介してもらった海上の航路標識に関する仕事に就くため、香川県丸亀市に転居した。この職業の選択の背景には、ベトナムにおける漁師の経験があったものと思われる。

しかし、ある時「もうできない」と思ってこの仕事を辞めてセンターに戻り、友人が多くいる神戸に新たな居を構えた。神戸では友人に紹介してもらった靴のゴム製造工場で働くこととなった。ここでは、朝出勤して昼食のために一旦自宅に戻り、昼食後再度出勤、そして夕方5時頃には帰宅する生活だった。

グエンさんは、1980年代前半から日本で生活している。この間の生活で最も苦勞したこととして日本語を挙げている。グエンさんと付き合う日本人はベトナム語が分からないので、ジェスチャーを用いて日本人の同僚と意志疎通を図ることがあった。センターで日本語を学習したが、あまり覚えられなかったとのこと。またアクセントの違い（方言）に関する学習が十分ではなかったためか、少しの間、センターで学習した「わからない」という言葉が、関西圏で用いられている「わからん」と同じような意味だとは気付かなかった。

様々な困難がある日本での生活でも、熱心なカトリック信者ゆえ、丸亀でも神戸でも教会へ通った。鷹取教会では委員を務めていた。

## 2. 震災当日から今日まで

### 〈震災の瞬間からの数日間〉

1995年1月17日5時46分、グエンさんが住む市営住宅にも大きな揺れが生じた。揺れている時は「怖い。早く外に出たい」と思い、「頭が真っ白」だった。数分すると揺れはおさまり、避難ために脱出すると、近隣に居住するグエンさんの親せき一家がマンションの下で待っていてくれた。娘曰く、震災直後はマンションの「階段が空中になって」おり、数日後全壊状態になった。

その後、親せきとともにとりあえず鷹取中学校に向かう。ここで2週間ほど暮らすことになるが、建物内に入ることは許されず、運動場で暮らしていた。その理由は、娘曰く「ベトナム人だから」であった。このため1月の寒空の下、大部分の日本人が建物内で避難生活を送るなか、2週間ほど屋外での生活を強いられた。娘によれば「ベトナム人と日本人の間に壁が生じていた」とのことである。

このような状況下でグエンさんは「親せきの多さ」を活かし、この2週間を乗りきった。周囲から「グエン族」（グエンさんの一族）と呼ばれるほどグエンさんには親せきが多かった（グエンさんが最年長者）。近隣で生活している人に限っても、娘曰く「40名近く」居たとのことである。それぞれの親せきの家からストーブやありったけの食料、毛布などを持ち寄り、寒さをしのいでいた。前に述べたとおり、この時グエンさんの自宅はほぼ倒壊状態にあり、一般の人であれば、この自宅に入ることは憚られるだろう。しかしグエンさんを含む親せきの男性は兵役の経験があり、この経験で身に付けた「サバイバル術」をもって倒壊した自宅に入り、必要な物資を持ちだし、寒空の下での2週間を凌いだのである。

一方、避難生活では物資のほか、正しい情報が必要となる。例えば仮設住宅の申し込み方法や食料・水の入手方法などであるが、行政機関からはベトナム語での情報提供は無かった・届かなかった。しかし、親せきを含む周囲

1 本インタビューにはグエンさんの娘も同席していた。本節では娘による補足についても、適宜述べる。

のベトナム人の中で日本語ができる人がおり、「情報センター」（各区に1か所設置された、避難生活に関する情報を提供する場所）から得た情報をベトナム語に訳してグエンさんたちに伝えていた。このためか、情報不足で困ったことはなかったとのことである。

またある程度落ち着いた頃、職場の状況が気になり訪問してみると、建物が壊れることなく、普段どおり営業していた。社長から「無事でよかった。可能ならば出勤して欲しい」と言われ、避難先から通勤した。また時間がある時は、安否確認と救助のため、ベトナムの知人宅を訪ね歩き、必要な援助をおこなっていた。結局、鷹取中学校では8ヶ月くらい生活した。

### 〈プレハブに転居〉

以上のとおり避難所生活を続けていたが、鷹取中学校の再開に伴い移動を余儀なくされた。移転先の当てがなかったところ、教会で知り合った人が所有していた長田区の土地を借り、そこにプレハブを建てて仮住まいとした。ここで1年くらい生活した。

### 〈仮設住宅での生活〉

その後、娘が手続きをしてくれた月見山桜木町にあった市営の仮設住宅に転居する。ここでは約1年半生活する。

### 〈そして、現在の住まいへ〉

2000年代前半からは現在の集合住宅に転居し、妻と病気療養中の息子とともに、生活している。時折、娘や孫が訪れる。困ったことがあれば、市役所などで相談している。

現在は安定的に生活しているが、一方で、この住居の賃借契約は20年間と定められており、残りは数年間（インタビュー時点）と迫っている。

## 3. おわりに 復興への助け：自分、家族、行政、そして「しゃーない」

以上の経緯を経て、グエンさんは現在でも鷹取で生活し続けている。この震災のような、人間の努力が及ばないような状況で、人は支え・支えられて何とか避難生活を送り、復興に向けて歩み出す。グエンさんの場合、誰に支えられたのだろうか。この点についてグエンさんは、自分、親せきを含む家族、行政を挙げる。まず、グエンさんは自分自身で被災を乗り越える努力をしてきた。また前述した震災直後のエピソードから分かるとおり、グエンさんを最年長者とする「グエン族」の人たちは助け合いながら震災を乗り越えてきた。さらに、行政機関に関しては、例えば市営住宅などについて、「担当の人に任すしかない」と委ねているのである。

以上の3者の力を借りつつ、現在の生活に至っているのであるが、もう一点、グエンさんにとって支えになったと思われるものがある。それは、グエンさんの持つ「しゃーない」（仕方ない）という考え方である。インタビュー中、この言葉が何度もグエンさんの口から語られた。

一般に「仕方ない」は、消極的な態度を表すものと考えられる。確かに、例えば市営住宅について「担当の人に任すしかない」と語っている。この発言には、「担当（行政機関）の人に任す」という行政機関に対する信頼感と、「しかない」という、面前の困難な状況の解決に対する諦めや消極性という2つの要素が含まれていると思われるが、実際に行政機関を信頼し、また困難な状況の解決に対して消極的なのだろうか。筆者なりに読み解いてみると、次のようなストーリーを描くことができる。

グエンさんはベトナムにおいて、祖国の分離と再統一、これらの混乱に伴う迫害の可能性、意に反する兵役、さらにはボートによる祖国脱出と、一般には想像できないほどの経験をしてきた。言い換えれば、直接的にベトナムという国家から、また間接的に国際社会から、長期にわたって一個人・一家族では到底対処しきれないほどの大きな影響を受けてきたと指摘できる。これらの経験から、統治者に対する大きな不信を持つと同時に、自分の力ではどうしようもないこともある、というある種の達観があるものと想定できる。ベトナム人の人生観を表わす言葉として「6割人生」がある（皆川 1997: 40）<sup>2</sup>。自分の希望を6割ほど達成できた人生であれば、まずまずの人生だ、という考え方であり、前述の達観から生じる、楽観的な人生の捉え方と言い換えることも可能だろう。

2 この点について、グエンさんと、インタビューに同席のグエンさんの娘に聞いてみたところ、3割希望が叶ったらずまずまず、との回答だった。

現在の生活において、自分の希望の何割が叶っているのか、それはわからない。しかし、これまでに経験した祖国の混乱から生じる悪影響があったからこそ、「0割」ではない現状を「しゃーない」と、ある種楽観的に受け入れられているのではないだろうか。

しかし、楽観だけだと流されるままの人生になるが、このような人生をも「しゃーない」として受け入れるのだろうか。その答えはノーであろう。現状を受け入れつつも利用できるものは利用する。例えば「行政に任せて」居所を確保しようとする姿が見られるし、それ以前に、「グエン族」の人々とともに面前の困難な状況に立ち向かおうとする姿も確認することができる。

つまり、必死に震災からの復興に努め、一方で様々な障壁を潜り抜けながら、納得できる状態まで回復に努める。それがグエンさんの「震災の記憶」なのではないだろうか。

## 文献

皆川一夫（1997）『ベトナムのこころ——しなやかさとしたたかさの秘密』めこん。

## 付記

グエンさんの聞き取り調査は、2015年8月10日にグエンさんの自宅で実施した。

（荻野 剛史）

# II フックさんの震災体験：長期テント生活からの自力での生活再建

## 1. はじめに

フックさん（仮名・50代前半）は、ホーチミンの南東約100kmの海沿いに位置するブンタウ省出身の男性である。難民として1980年代はじめに10代後半で来日し、日本での生活は30年余りになる。

調査を依頼した時から「忙しい」といわれていたうえ、調査場所の確保に手間取り待ち時間まで生じたものの、快くインタビューに答えてくれた。紹介者からはゆっくり話せば日本語でのインタビューが可能であると聞いていたが、本人の強い希望もあり、通訳の女性を介して調査を行うこととなった。

## 2. 来日してからの生活

難民として来日し、生活上困ったのは言葉の壁であった。来日後、姫路市の定住促進センターで半年くらい日本語を勉強し、2年後にドライバーの仕事を得た。2年経っていたので、トラックの仕事始めた頃にはある程度言葉はわかるようになっていた。ベトナムにいた頃もトラックではないが運転にかかわる仕事をしていたため、自動車運転免許証は持っていた。1985年にベトナムの運転免許証を日本で使えるものに切り替えた。

震災時も大阪、奈良など近畿圏内へ荷物を運ぶトラックの運転手をしており、地震により仕事は2、3ヶ月中断したが、再び同じ会社に復帰することができた。その後5～7年間その仕事を続け、現在は別の仕事に就いている。妻と長男、次男の4人暮らしである。

## 3. 震災時の記憶

### 〈震災当日〉

フックさんは、在日14年目に被災した。当時フックさんは30代前半であり、妻と2歳になる長男と3人で暮らしていた。地震発生は早朝だったため、自宅アパートで家族3人で就寝中だった。

地震が起きたその瞬間は、「この世が終わる」、「全てが滅びてしまうのではないか」という思いを抱き、大変な恐怖を感じた。当時は「地震の時はこうしましょう」というような防災教育や情報について教えてもらったことは

全くなかった。とにかく外に逃げたくても、地震発生が真冬の午前5時46分と早朝日の出前であり、真っ暗でどこが出口かもわからなかったため、「どないしよう、どないしよう」と家の中で立ち止まって途方に暮れるしかなく、妻もフックさんと同じ状態であった。

しばらくして、揺れがおさまって外に出ようと思った時には、外がうっすらと明るくなり少し見えるようになってきていた。この時期の日の出時刻は午前7時過ぎである。自宅の扉が少し歪んでいたものの、幸い出口を塞いではいなかったため、足で扉を蹴破って外に出ることが出来た。出られたのは揺れ始めてから30分くらい経ってからだった。誰かに連絡したり、ニュースを見ようにも、家の中がグチャグチャになっていたのと暗かったのとで、テレビも電話も使うことが出来なかった。

その時は困った云々というよりも、頭の中で何も判断がつかず、「もし次に余震が起きたらどこに逃げたらいいんやろ」という戸惑いしかない、頭の中が真っ白な無計画の状態であった。

公園まで向かったのは、フックさん自身の判断というよりも、外に出てみて日本人、ベトナム人関係なく人々が歩いているその流れについて行ったからであった。公園に行ってみたら多くの人が集まっており、そのなかで顔見知りの人々に「家が火災に遭っていないか」、「倒壊していないか」など、それぞれの状況を尋ねることが出来た。

### 〈公園でのテント生活〉

フックさんの自宅アパートは住める状況ではなかったため、その後公園で生活することになった。テントが支給されるまでの最初のうちは、ちぎった段ボールとブルーシートを敷いただけの天井が無い生活を強いられた。自宅はグチャグチャで散乱はしていたが、焼けてしまったり、物を取り出せないほど崩れていたわけではなかったため、布団類を運び出して防寒に使うことはできた。約1週間後にテントが設置され、その後しばらくテントで生活し、2、3か月後に再開された元の職場へもテントから通勤していた。この職場はベトナム人が経営している。ようやく仮設住宅が建てられ、入居できたのは1年後のことであった。つまり、1年間テント生活を余儀なくされたことになる。

公園で生活している時に、フックさんたちから行政組織などに何か支援を求めに行くことはなかったが、どこからの支援者の訪問が数週間に1回程度あり、「いつごろ仮設住宅が完成する」などの復興、支援の見通しを教えてくれたそうである。その支援者は通訳者を同伴してはいたが、「日本⇔英語⇔ベトナム語」という二重通訳を介してのやり取りであったため、当然のことながら時間を要し、ゆっくり相談できる雰囲気ではなく、その支援者はどういう組織の人なのか、どういう身分なのかについては当時も今も分からないとのことである。

フックさんがテント生活をしていた1年間は、週3、4回自衛隊が設置した仮設のシャワーを使用していた。幸い当時2歳だった長男も妻も健康状態は良好で、特に病気をすることはなかったが、もし病気になっていたら医者が訪問して診療してくれるようなことはなかったと思う。おそらく医者を探しに行かなければならなかっただろうとフックさんは語った。

### 〈当時あればよかったと考えられる支援〉

フックさんは、今から思えば、20年前にしてはよく支援してくれたと思うと語った。ただし、もしまた同じような災害が発生した場合には、言葉のフォローがもっとあれば、安心できて良いと思っているとも述べた。食べ物や住居など物質的な支援については、当時色々なものを持ってきてくれており、助かっていたそうである。

### 〈生活再建から現在の暮らしに至るまで〉

役所から住宅の倒壊の程度が半壊との認定を受け、フックさんは100万円の援助は受けたが、それ以外は誰かの力に助けられたわけではなく、自力で生活を再建したとのことである。その当時は、現在のようなベトナム人コミュニティがなかったため、個人の力で建て直すしかなかった。フックさんは先祖代々カトリックの信者であり、来日後は鷹取教会に通うようになっていたものの、教会には特に支援を求めなかった。当時、教会へ行って要請すれば何かしらの援助は得られたと思うが、頼むほどではなく、自力でなんとか再建できたとフックさんは語った。

現在は心配すること、困ることは特になく、フックさんの生活は安定している。

あの震災をきっかけにして、フックさんは神様に心を向け神様を求める気持ちがより高まり、神様への感謝の気持ちも高まったとのことである。

フックさんは震災を経験したからこそ得られた次に活かせる教訓もたくさんあったと話すものの、教訓になった、

この具体例は「分からんなあ」と言葉を濁し、苦笑いしていた。しかし、確かに何らかの教訓はあったようである。

#### 4. おわりに

フックさんは、震災によって住居が半壊し、そこに住める状態ではなくなったため、公園での長期にわたるテント生活を寒い時期から1年間も強いられ、幼い子どもを抱えて不安や苦労も相当なものであっただろう。にもかかわらず、支援者の訪問は数週間に一度、しかも二重通訳によって対応するという状況であった。幸い2、3か月後にベトナム人が経営する元の職場に復帰できたため、経済的な面は早期に立て直すことができたからか、フックさんは当時の支援に対してさほど否定的ではなく、当時としてはよくやってくれたほうだと評価している。

しかしながら、フックさんが仕事に出かけている日中の時間の妻や子どもへのサポートや、支援に関する情報が行き届いていたかどうか、彼らが母語で真意を伝え合える場があったかどうかなど、検討が必要なことは山積していると考えられる。

#### 付記

フックさんへの聞き取り調査は、2015年7月26日にカトリック兵庫教会内の一室で実施した。

(瀧尻 明子)

### III 被災時における就業の重要性 ：震災後に結婚、起業を実現した呼び寄せ男性の生活史

#### 1. はじめに

##### 〈来日の経緯〉

クオンさん（仮名・男性）は、1970年代後半にベトナムのホーチミン市の南端西側に位置する8区に生まれた。1990年代初め、クオンさんはすでに難民として来日していた兄の呼び寄せ（合法出国計画：Orderly Departure Program、通称「ODP」）により、故国を離れて日本へやってきた。

##### 〈来日後の日本での暮らし〉

来日後、クオンさんは、姫路定住センターで6ヶ月のあいだ日本語を学んだ。クオンさんは、来日当時すでに中学校の就学年齢をこえており、また仕事もしなければならなかったため、日本の中学校や高等学校で学ぶことはできなかったという。そのため、仕事のかたわら辞書などを用いながら日本語を独学で習得し、来日してから4年ほど経った頃には、日本語をだいたい理解することができるようになったそうだ。日本語を書くことは不得手であったものの、読むことはできるようになっていたため、交通ルールのテキストなどを読んで自力で勉強したうえで、自動車学校に入学して自動車免許を取得することができた<sup>3</sup>。

クオンさんは、これまでずっと神戸市長田区内で製靴業の仕事に従事してきた。最初に就職したT製靴には8年間くらい勤務し、工場の責任者にもなったが、同社は社長が突然亡くなって倒産してしまったために転職を余儀なくされた。離職後、半年ほどは雇用保険を貰ってやりくりして、二番目となる会社に就職した。その会社にも十数年にわたって勤めたが、3年ほど前に独立して靴の加工会社を自分で起業した。現在、同社では経営者であるクオンさん夫婦のほか、計8人のベトナム人従業員を雇っているという。

とはいえ、「外国人」であるクオンさんが、日本において起業することは簡単なことではなかったようだ。独立当初は日本の銀行から資金を借りるのに苦労したという。会社の売り上げ実績は良く、ほかに借金などもしていなかったため、会社を設立して半年ほど経った頃からようやく銀行から融資してもらえるようになったそうだ。現在

3 なお、日本での住居（賃貸アパート）の契約については、兄に保証人になってもらって不動産屋を通じておこなったという。

の年商は7,000万円くらいで、おもな取引先は日本企業である。1年ほど前には、工場兼自宅を建てることもできた。

クオンさんは震災後の22歳の時に、ベトナムで暮らしていた時から付き合いのあった1歳年下の女性を日本に呼び寄せて結婚した。その後、長男（現在高校生）と長女（現在中学生）が生まれ、現在は家族4人で暮らしている。クオンさん自身は日本語に不自由はないものの、妻は日本語が得意ではないため、子どもの学校や役所等とのやり取りはこれまでクオンさんがおこなってきたそうだ。2人の子どもたちは日本語とベトナム語のバイリンガルではあるが、日常語はほぼ日本語であり、2人ともベトナム語の読み書きはできないという。家庭内ではクオンさんと子どもたちは日本語で会話し、妻と子どもたちはベトナム語と日本語を混ぜて会話しているそうだ。

## 2. クオンさんの記憶

### 〈地震発生当時の状況とその後の住まい〉

1995年1月17日の地震発生当時、クオンさんは3階建ての民間の賃貸アパートの2階に住んでいた。地震によりアパート1階部分にあった駐車場は潰れてしまっていたのだが、発生直後は状況がつかめず、「何があったんやろう」と思って窓を壊して部屋から出て避難したという。

避難後、幸いなことに近所のベトナム人たちはみな無事であったことを、近くの鷹取中学校（神戸市須磨区）や駒ヶ林公園（神戸市長田区）で確認できた。クオンさんの最初の避難先は鷹取中学校で、そこには日本人だけでなく、多くのベトナム人たちも避難していたという。しばらくは湊川公園<sup>4</sup>でもらったブルーシートや廃材を使って作ったテントで暮らしていた。しかし、神戸市から退去命令を受けたこともあり、カトリック鷹取教会（当時の名称、現在は「カトリックたかとり教会」）が建てた紙のログハウスに申し込んで1年ほど住んだ。テント暮らしと比べると、そこはとても住み心地が良かったという。その後、西代（神戸市長田区）に建設された仮設住宅に応募して入居した。そして1998年頃、仮設住宅が閉鎖されることにともない、罹災者が優先的に入居できた市営住宅へ転居した。

ちなみにクオンさんは、当時勤めていた会社に大きな被害はなく、震災後3ヶ月ほどで職場に復帰できたため、仕事、収入の面での困難はなかったようだ。クオンさんは震災後それほど経たない時期に、現在の妻を日本へ呼び寄せて結婚することを決めたが、その際にある程度、環境の整っていた仮設住宅に住み、きちんと仕事にも就いていたことから、将来についての不安はそれほどなかったという。相手をあまり長い時間ベトナムで待たせておくわけにはいかないと考えていたそうだ。「昔は[ベトナムへの]電話が高かったんで…」と当時のことを振り返っていた。

### 〈被災直後の困難と支援について〉

クオンさんにとって、被災時に特に困ったのは住居の問題であったという。避難先の湊川公園には、ベトナム人住民約10世帯（当時クオンさんは父母や兄妹と暮らしていた）、日本人住民約10世帯ほどがテントで暮らしていた。夏になると暑さのせいで早朝5時にはもう「暑くて暑くて寝られへん」状況だったことは、クオンさんが最も苦勞した思い出である。そうした生活上の辛さはありつつも、湊川公園での生活中に大きなけがや病気をした家族はいなかったそうだ。

なお、外国人であるという理由により、大きな不利益を被った経験はなかったとクオンさんは語っている。鷹取中学校や湊川公園での生活においても、治安などの問題はなかったという。「みんな同じ感じで、みんな何もなかった」ため、住民間のトラブルはなかったそうだ。

また、クオンさんの記憶によれば、被災時に県や市などの行政からの支援はほとんどなかったという。仮設住宅は設置されたものの、神戸市垂水区や同市須磨区の名谷など、クオンさんの自宅や職場があった長田区から遠かった。一方、職場だった会社は湊川公園から近かったため、しばらくは仮設住宅に入居する気は起きなかったそうだ。遠方の仮設住宅に入居した場合、神戸市一帯が震災の深刻な被害を受けている状況の中で、新たに職を探さなければならなかったことは、クオンさんにとっては大きな懸念であった。ちなみに、クオンさんは被災者として10回くらい市営住宅の入居募集へ応募したものの、まったく当たらなかったという経験も語ってくれた。

4 本章においてたびたび言及される「湊川公園」という名称の公園は、神戸市兵庫区内のものがあるが、長田区からはやや遠方にあるため、同区内の「新湊川公園」のことを指している可能性がある。

## 〈生活再建までの流れ〉

「〔公的支援は〕何もなかった。全部自分で…」とクオンさんが語ったように、被災直後は行政による支援や情報提供はほとんどなかったようだ。当初、神戸市から受けた支援は公園生活のためのブルーシートの提供くらいであったという。震災後1年くらいすると、一 가족ごとに、昼食と夕食用の食券や浴場の利用券が提供されるようになったが、それまでの1年間はほとんど何も支援はなく、そうした苦労は日本人住民も含めて「みんな一緒だった」そうだ。クオンさんは当時のことを、「みんな自分で潰れた家とかから木をもらってきて床を作ったり、ブルーシートをひいたりして生活していたんです」と振り返っていた。しかも、そうこうしているうちに、公園で生活していた人びとに対して、行政は水道代や光熱費を請求するようになったため、公園に住んでいた人たちが皆で分担して支払うことにしたという。

なお、神戸市から罹災見舞金が30万円くらい支給されることになり、知人の何人かは申請して受給していた。しかしながら、クオンさんは、罹災見舞金を受け取ってしまうとその後は罹災証明書を発行してもらえず、一般住民の扱いになってしまって市営住宅の申し込みの際に、罹災者としての優遇を得られなくなる恐れがあると考えたため、そうしたお金は受け取らないことを選んだそうだ。

このような行政の対応の一方で、公園での生活においてクオンさんが助けられたと実感したのは、カトリック鷹取教会の当時の神父たちによるボランティア活動であった。困ったことがあった時には、神田神父が相談に乗ってくれたそうだ。特に避難当初、近所の学校や会社の建物内のトイレを無断で使わざるをえない状況にあったため、神田神父たちが公園に仮設トイレを設置してくれたことは、とても助かったと語っていた。

また、復職するまでの期間は給料もストップしていたため経済的には困ったのだが、近所のスーパーなどで、「どうぞ持って行ってください」という形で生活物資を提供してもらえたという。いちおう警察は立っていたものの、生きていくうえで必要なぶんだけの水や食べ物を持って行っても良かったことはありがたかったと振り返っていた。また、当時勤めていた会社の社長も良い人で「これをあげるわ」とたびたび物資を援助してくれたそうだ。

なお、兵庫県姫路市には親せきがたくさんいたため、被災後、親族から一緒に住まないかと提案されたこともあったが、ずっと長田区で暮らしていきたいと思っていたため、姫路へ引っ越すことは考えなかったという。「大変だったけど〔長田区で生活してきて〕良かったと思っています」と語っていた。

## 3. おわりに

以上のように、クオンさんに関しては、幸運にも勤めていた会社が地震の被害をほとんど受けず、その社長にも親切にしてもらえたため、震災後も仕事や収入の面では安定していた。そのため、クオンさんは住居以外に関しては、大きな問題に直面することはなかったといえるだろう。

とはいえ、阪神・淡路大震災の際には、行政から住居等についての支援や情報が迅速に提供されなかったことから、そうした面に関しては、東日本大震災の支援のあり方は良かったのではないかという印象をクオンさんは持っている。湊川公園で生活していた時に神戸市による被災者についての調査はあったものの、公的支援は不十分であったし、また多くの被災者が出た長田区からかなり遠方に仮設住宅が建設されたことも、住民の通勤や通学のことを考えれば問題であったと語っていた。

クオンさんは、現在の長田区での生活において、困っていることはとくにないという。阪神・淡路大震災を経験したうえで、現在の自分たちの生活があることから、必ずしも悪い経験だったとは考えていないという。なお、クオンさんは信仰に厚いカトリック信徒の家庭で育ったため、ベトナムにいた頃から教会には毎日のように通っていたそうだ。そうした背景もあって、長田区のカトリックたかとり教会の近くに住み続けてきたという。クオンさんにとって、自分が居住し、仕事をしている地域にカトリックの教会があることは重要であるようだ。

## 付記

クオンさんへの聞き取り調査は、2015年8月9日にカトリックたかとり教会内で実施した。

(高橋 典史)

## IV ことばの重要性：ベトナム料理店を経営する女性の経験から

### はじめに

長田区で小さなベトナム料理屋を切り盛りしているリエンさん（仮名・女性・50代）がベトナムを出たのは、1980年代後半のことである。ベトナムから香港へ移り、2年後の1989年に香港で結婚した。夫となる男性とはベトナムにいる頃からの友人で、彼も香港へ来ていることは知っていたが、まさか香港で再会するとは思っていなかった。約6年間を香港で暮らし、日本へ渡ったのは90年代のはじめであった。夫が先に長田へ来て、その1年半後に彼女と子ども（当時9ヶ月）とともに来日した。現在は、子ども3人とともに暮らしており、近所に弟と妹が住んでいる。

店の開店資金は友人を含む3人で共同出資して工面した。家庭料理の店なので、店を開くこと自体は簡単であった。香港にいた頃にレストランで働いていたので、若い頃から料理が好きだった。1998年からこの場所で店を営んでいる。店をオープンした当時は、まわりにベトナム料理屋はなかったので珍しく、多くの日本人の客が来てくれたという。友人が友人を呼び口コミで店の評判が広がった。吉本興業の芸人が来店したり、「あまからアベニュー」などTV番組に3度出演し、雑誌にも紹介されたので日本人客が多かったと当時の様子を振り返る。ベトナム人の客は土日に来ることが多かった。

彼女の店には日本語のメニューも用意されている。店の雰囲気は、2000年代以降に流行したようなエスニック料理屋というよりも、アットホームな雰囲気がある。現在は、近隣に住むベトナム人や神戸に働きに来る外国人労働者たちの憩いの場となっているようだ。店のなかには、回収を待つビールケースが積まれており、酒盛りがあったことをうかがわせる。注文を聞き、料理をつくるのはすべてリエンさんの仕事なので、瓶ビールのおかわりはセルフサービスだ。そんな気楽さもこの店の魅力さのひとつだ。

### 被災時の状況

震災時は、日本に来てから2年目、神戸に住み始めてから約1年半後のことだった。当時は日本語もよくわからなかったのとにかく大変だった。リエンさんが来日してから日本語を勉強したのは、姫路定住センターでの4ヶ月間のみであった。彼女が生まれて初めて経験する地震であり、子どもも小さかった。当時は勤務していたケミカルシューズ工場の社長が借り上げているアパートに住んでいた。建物自体は大丈夫だったのだが、自室が崩壊したために住み続けることができない状態になった。家の修理期間などを含めると約半年間は、その住居を離れて暮らすことになった。

そこでリエンさんは南駒栄公園でテント暮らしをすることになった。テント生活は1ヶ月間続き、そこではボランティアが毎日食事を持ってきたので順番に並んで受け取った。その時の状況を振り返って、食べるものも着るものも、とりあえずはあったという。ただし子どもは1歳と2歳で手間がかかり、ブルーシートを敷いたテント暮らしは寒く、風呂の数も少なかった。水もないので洗濯することもままならず、着る物は使い捨てになった。今から振り返るとすごい生活だった。学校などの他の避難所には行かず、ずっとテント暮らしをしていた。どこの避難所も満員であったからだ。彼女は車があったので、車で移動することができた。

当時は日本語があまり分らなかったのも、テント生活時に十分な情報を得ることができなかった。そこで隣でテント生活をする日本人の様子をうかがって行動するようになった。日本人の家族がテント暮らしをしており、食料配給時には彼らに同伴することで情報の不足を補った。困ったことは電話ができないことだった。国際電話ができずベトナムへは3日間電話をすることができなかった。普段は自宅電話からベトナムへ電話をしていたが、震災後は公衆電話に並んで「1人何分」という決まりのもと電話をすることになった。久しぶりにベトナムに電話をすると、ベトナムの人々は死んだと思っていたので涙したという。

当時の記憶を辿る中で、「今考えると、その時はほんとうに困ったけど、今思うと…」と言葉が詰まる。単に適切な日本語が思いつかなかったようで、今日のインタビューのために隣のテーブルで待機をしていた息子に通訳をお願いすることになった。息子によると、物資面では問題なかったが、家に帰ることができないことに困ったという。ただしそれは皆も同じだったので、自分だけの問題ではなかったと付け加えた。日本人も同じようにテントで

暮らしていたので、あまり当時のことは覚えていないのだが、日本人とも互いに励まし合うことはあった。震災前に働いていた靴工場では、日本人からの差別があったが、震災時に差別を経験することはなかった。

## 震災の経験と支援状況

彼女が繰り返し語るのは、ベトナムには地震がなく初めての地震で怖かったということである。日本で暮らす難民のサポートにあたる難民事業本部（RHQ）は、地震直後ではなく数日後に来てくれた。難民事業本部の日本語学習センターを利用していた当時から、日本には地震があることを知っていたが、十分に日本語を理解していたわけではなかった。当時の日本語学習は、通訳がいなかったため「これは何ですか？」という質問と答えを練習するだけで、その練習をとおして「これはコップというのか」というようなことを学ぶという具合であった。そのような日本語学習をとおして、当時、地震については絵をとおして教わったが、まったく実感はわかかなかった。先に日本に来た人も地震について話題にはしていたが、彼らが語る地震は、そんなに大きなものではなかった。

彼女は1ヶ月間のテント生活を経て大阪の知人の家で1週間暮らした。その知人は同じ時期に日本に来たベトナム人である。しかし、小さな子どもを知人宅で育てるのは大変だったので、ベトナムの実家へ戻った。そして1995年12月にもうひとりの子どもが生まれた。2～3ヶ月間ベトナムで避難生活を送ったが、日本にいる友人と連絡をとり日本の様子について情報収集を続けた。ベトナムから帰ってきたのは半年後である。ただし子どもは実家に預けて、彼女だけが日本へ戻り働いた。彼女は、働かなければならなかったからだと振り返る。

日本語が分からなかったので、震災前と同じ靴工場で働いた。言葉の問題から職場で日本人とあまり仲良く慣れなかった。ただし、震災後に少しずつ日本語がわかってくると会話ができるようになり、職場の同僚の態度や環境も変わったと振り返っている。

彼女が一貫して言葉の問題を指摘するように、災害時に必要なものは「言葉が通じること」であるという。緊急の時にどう動くかということをはじめ、日本に来たばかりの人々が困るのは、学校、病院、区役所などで通訳が必要になることである。区役所にも通訳はいない。「この20年間でもっとも苦勞したことは何か」という問いについても、「来日後、日本語が分からなかったことだ」と繰り返す。日本に来た頃は子どもが小さく病院の世話になることも多かったが、当時は会話をすることもできなかったと振り返る。現在は日本語が上手な人に通訳をお願いできるが、当時は通訳ができる人が少なかった。

言葉が通じることの必要性を訴えるのは、外国人への支援としての必要性だけではなく、言葉が分からないと他の人に迷惑をかけるかもしれないからだと言っている。現在、彼女兵庫県の多文化サポーターとして、学校の通知表の翻訳などのボランティア活動にも参加している。

震災後の生活の再建について、〇〇人だから△△であるというわけではなく、日本人でもまじめな人とそうではない人がいると指摘する。彼女は、若いころからベトナム人をみて、頑張らないといけないと思うようになったという。そして出産後、子どもが勉強できないと困るので、応援をして勉強ができるようにしてあげたいと考えようになった。店をオープンさせたのは1998年だが、自営業を営むことを決意したのは、子どもが小さく会社勤めが難しかったからである。

現在はベトナム料理店を営んでいるが、過去の選択肢について尋ねたところ、彼女は仕事が好きなので、どんな仕事もできたと思うという。もっと日本語を上達すべく勉強する機会をうかがっているが、子育てや仕事があり、その時間を確保できないことが問題である。日本で育った子ども同士の会話を聞いて、何を言っているのか分からないこともある。このインタビューの途中で息子に通訳をお願いしたように、言いたいことがあっても説明が難しいので、モヤモヤすることもあるという。

## おわりに

リエンさんの震災の経験が、難民事業本部の日本語学習センターの時点から語られることが示唆するように、震災時の経験は平時の経験が凝縮されたものである。彼女はゆっくりと、はっきりとした口調で、時に言葉を慎重に選びながら、当時の様子を振り返ってくれた。印象的であるのは、彼女は言葉（日本語）の問題、ベトナム語の情報十分ではないことを指摘するのだが、それは、こうした支援が不十分であると批判し、糾弾するようなもので

はない。「言葉が分からないと日本人にも迷惑をかける」と付け加えたり、「家に帰ることができないことには困ったが、それは私たちだけの問題ではなく日本人も困っていた」と述べているように、そこには日本人とともに生きる生活者としての視点を垣間見ることができる。

彼女がこのような認識をもち、日本語を勉強することへの意欲を欠かさないことへの背景のひとつには、インタビューの中で語っているように、日本で生まれ育ち、日本語を流ちょうに操る子どもとの関係も大いに影響していることが考えられる。

## 付記

リエンの聞き取り調査は、2015年8月10日にリエンの飲食店で実施した。

(久保 忠行)

## V ハンさんの震災の記憶

### ：被害のない地域に逃れ、ベトナムという避難先を持っていた幸せと罪悪感の狭間

#### 1. はじめに

ハンさんは、1970年代生まれの40歳代前半の女性である。台湾生まれの父親とベトナム人の母親との間に生まれ、幼い頃に両親と同胞、その他のベトナム人とともにボートで祖国から脱出し日本で育った。20歳代前半に神戸市で阪神淡路大震災を経験した。現在は、大阪市のビジネス街主要駅に直結するビル内でベトナム料理レストランを営んでいる。

幼い頃から日本で育ったハンさんには通訳の必要はまったくないため、3人のインタビュアーとハンさんでインタビューを実施した。その時たまたま行われていた店舗改修工事の騒音と、震災後に日本に居なかったため参考にならないのでは、という点について何度も詫言ながら、ハンさんは一つ一つ丁寧に、表情豊かに回答してくれた。

#### 〈難民の国籍〉

ハンさんの国籍は日本では一応ベトナムということにしているが、ベトナムに行くと日本人のように扱われるそうである。難民として出国しているため、本来は国籍を持っていない状態である。ただ十数年前に、理由は不明だがベトナム領事館がパスポートを発行してくれることとなり、ベトナムのパスポートを有するベトナム国籍の者として、以前の再入国（許可証の頃）よりはスムーズに受け入れてもらえるようになった。ベトナム本国でベトナム国籍であると認められるかどうかは疑問で、人によって国籍のあり方が異なっていると感じている。

#### 〈ハンさんの家族と来日までの経緯〉

ハンさんの出身地はベトナム東北部、ハノイ市から70kmのところの旧ラオフー村、現在のフートー省にあたる地域である。ベトナムから出国したのは1978年頃、ハンさんが4、5歳の時であった。

父親はもともと台湾人であり、日本が台湾を植民地にしていた時代に「日本人」として、農業開拓技術をベトナム人に指導するためベトナムに渡った。母親はベトナム人であり、一緒に難民として逃れてきた。昨年ベトナムへの一時帰国中に脳梗塞を発症し、高齢でもあることからそのまま帰国せず、現在はベトナムで療養中である。兄弟は10人と多く、ハンさんはその末子である。全員健在で、上から長女、長男、二女、二男、三男、四男、五男、六男、三女、ハンさんとなり、それぞれ2歳程度離れている。このうち、長女（以下長姉）と二女（以下二姉）は当時すでにベトナム人と結婚していたため、出国しなかった。

ベトナムから脱出した主な理由は、父親がベトナム社会で「日本人」として扱われていたため、ベトナムの国営企業には入れず、子どもたちは高校から先の教育は受けることができなかった。そういう政治的な不利益をこうむる状態からなんとか脱したいという思いから父親は難民として出国する決意をしたそうである。ベトナムに残った長姉と二姉は日本国籍だが、夫がベトナム人であるためその子どもはベトナム国籍となり、政治的な面での問題は

なく、現在長姉はハノイ、二姉はホーチミンに在住しており、母親はこの二人のどちらかの元で療養している。その他の同胞はすべて日本に生活の基盤を構えており、ハンさん自身は夫と2人の子どもの4人暮らしである。

来日するまでの経路は、ボートでベトナム北部最大の港湾都市となっているハイフォンから両親、同胞、その妻ら総勢16人とその他の大勢のベトナム人とともに出航し、最初に香港キャンプに収容された。そこで次の移住先を決める際に、父親の出身地である台湾も選択肢の一つになっていたが、日本語教育を受け日本語に不自由を感じていなかった父親のアイデンティティは台湾人よりもむしろ「日本人」であったため、日本に移住することとなった。

## 〈来日してからの生活〉

来日後は、まず長崎の大村難民一時レセプションセンターに入所し、その後姫路市に設置された定住促進支援センターで日本社会への適応準備をおこなった。ハンさん自身は幼かったため、その頃の記憶は曖昧である。

定住促進支援センター修了後は、そのまま姫路市に居住した。来日後7、8年が経過した1986年のドイモイ政策あたりから、ベトナムを相手にした商売が可能になり、父親が中古の自転車や電化製品を、次いで中古のバイクや車、最終的にはバスまでもベトナムに向けて販売するようになった。そのころ姫路から神戸市兵庫区に転居し、中古品を扱う貿易の仕事を継続していた。父親の死去後も兄らが協力して引き継いでいた。

## 2. 阪神淡路大震災の記憶

### 〈自宅とその周辺での体験〉

ハンさん一家が神戸市内に転居してから9年後の1995年に阪神淡路大震災を経験した。この時、ハンさんは22歳になっていた。父親はその時すでに死去しており、長姉と二姉はベトナム在住、六男（以下六兄）以外の兄らはすでに独立していたため、神戸市内の自宅マンションには母親、姉（三女、以下三姉）、六兄の4人で居住していた。マンションはL字型の構造で、4階建ての3階部分であった。

震災発生はちょうど旧正月の時期であったため、同居していた母親と六兄はベトナムに帰郷しており、被災した時は三姉とハンさんの2人だけであった。別のところに住んでいた兄らも四兄を除いてベトナムに帰郷していたが、それを知ったのは被災した後であった。

震災の前日から友人宅に泊まりに行く予定にしていたが、なぜかそれが流れて自宅で被災したということ強く記憶しているとのことであった。母親が不在だったため、普段は母親が使用している大き目のベッドで三姉と二人で寝ていた。地震発生は午前5時46分と早朝で、大きな音に気付いたが、それは自宅マンション1階部分の醤油店敷地に普段から置かれているドラム缶が倒れたのだらうと思っていた。しかし三姉は先に揺れと異変に気づいており、自分に布団をかぶせてくれた。その後大きな揺れが起き、とりあえず布団をかぶった。

揺れがおさまってからメガネを探し、マンションなので（簡単には崩れないだろうと）安心はしていたが、公園かどこかのほうが安全だろうと考えて三姉とともにとにかく部屋から出ようということになった。幸いハンさん宅は家具の配置がよかったのか、部屋の向きがよかったのか、多少は食器が割れてガラスで足に軽い傷を負ったものの、隣のマンションや同じ棟の別の部屋の人は玄関のドア枠が歪んだり、柵や下駄箱が倒れて出にくかったと聞いたことを思えば、ハンさんはさほど苦勞なく部屋から脱出することができた。L字型の建物は二方向から支え合っただけのような印象があるが、実はつなぎ目ができるため通常より脆弱になるらしいことを当時聞いたことがあるそうだ。実際つなぎ目付近の住人は玄関が歪んで出られず閉じ込められてしまっていた。

出口に向かう階段には損傷がなく、家のすぐ近くの公園へ行くため階下まで降りたところ、すでに地面は盛り上がり割れし、自宅マンションが傾いているのを目にした。マンションの入り口を出て左方向に約2分歩けば公園だったが、行くまでの間にガスの臭いが立ち込めていた。爆発に対する不安は強かったが、三姉とともに意を決して公園に向かった。

その公園の横に建つマンションには、母親と親しくしていたベトナム人が二、三家族住んでいたため、ハンさん自身は特に交流を持っていなかったが、その人らに会えることも期待していた。結局そのベトナム人らが公園に来ていたのかどうかは記憶にないが、日本人も多く避難してきていた。たまたま居合わせたホームレスの人が火を起

こしてくれたので、とりあえず公園でしばらく暖を取って過ごしていた。

余震はあったものの、最初の危険な様子はおさまったと考え、公園に来てから2～3時間後、明るくなってしばらく経った頃にマンションに戻ってみることにした。正直なところ、公園かマンションにいればたくさんいる兄らのうち誰かが迎えに来てくれるだろうと思っていた。しかし一向に誰も来る気配がなく、さすがにこれはおかしいと思い始めていた。その時は、四兄以外の兄らがそれぞれベトナムに帰っていることを知らなかったので、とりあえず状況を把握しようと、景品で当たったまま使わずに置いていたポータブルテレビの電源を入れたてみたところ、被災現場の映像が映し出され、それによって比較的早い時期から何が起きたのかについて情報を得ることができた。自分たちに関しては無事であり、建物もさほど壊れず、周辺での火災も起きていなかったため、その映像を見るまではそんなに重大な被害が出ているとは思っていなかった。2時間、3時間と時間が過ぎても誰も迎えに来ないという、その時間は多少不安を感じたという程度であった。

### 〈長田区の兄たちの安否〉

ヘリコプターがたくさん飛んでいるのは分かっていたが、長田区が燃えている上空からの映像を見て、初めて自分の目で長田区の方角を確認したところ、確かに燃えて煙が上がっているのが見えた。この状況から誰も迎えに来ることなどできないとようやく悟り、長兄とも電話もつながらなかったため、慌てて三姉と一緒に自転車で行ける範囲の長田区在住の三兄、四兄の家に行ってみることにした。

四兄は特に火災が激しかった菅原市場近くの一軒家に、三兄はそこから少し離れた市営住宅に住んでいた。市営住宅の三兄宅は無事で、屋外に逃げ出していたその妻と子ども二人にすぐに出会うことができた。三兄はベトナムに帰省中であった。一軒家である四兄宅は倒壊しており、そこをハンさんらが通り過ぎた後に火の手が上がって四兄宅周辺は焼け落ち、その時点で四兄のことは諦めていた。しかし、その後どう連絡がついたのか記憶が曖昧だが、たまたま四兄の妻（日本人）の実家がある加古川市（神戸市中心部の西40kmに位置する）に一家で出かけており、全員無事であることが分かった。テニスが趣味である四兄は通常、週末に妻の実家に行ってテニスをし、月曜日には仕事のため戻るが、震災当日の月曜日は何故か加古川市に留まっており、人的被害からは免れた。おそらくいつも通り自宅に戻っていたら助かっていたのではないかと思う。

### 〈神戸市からの脱出〉

四兄と連絡がつき『そこから動かないように。迎えに来るから。』と言われ、四兄が仕事関係のベトナム人から荷室つき大型トラックを借りて迎えに来てくれた。布団や貴重品を持って、ハンさんと三姉、三兄の妻とその子ども二人、その他ベトナム人大勢が荷室に乗り込み、「とりあえず神戸からは出よう」と震災当日のうちに被害のなかった加古川市の四兄妻の実家に移動することになった。その道中、須磨の海から消火用水を取水するトラックに主要道路が占拠されており、危険箇所はなくてもなかなか進むことができなかった。昼頃に出発したが、夜になってようやく神戸市北接の三田市を通る道に大きく迂回し何時間もかけて、その日のうちにはK市に到着することができた。他のベトナム人はさらに西の姫路市を目指していた。このようにハンさんは被災後まもなく神戸市を脱出したため、被災体験といっても地震発生翌日からは被災地域外での体験ということになる。

ハンさん自身は誰かと連絡を取ることはなかったが、兄らが他の家族の所在を、ベトナムにいるか、国内にいるなら無事かどうかについて、その日のうちに確認し、全員の安否を知ることができた。ベトナムに帰省していた同胞らとの連絡には時間がかかり、こちらの無事を知らせるのに約2日を要した。ベトナムでは悲惨な被害状況が報道されており、ベトナムにいる親族らはハンさんらが全員死んだと思っていたそうである。

### 〈神戸市を離れてからの生活〉

加古川市では、温かいお風呂に入ることができるなど特に困ったことはなかった。しかし、幸せだと感じる一方、「これでいいんやろか」と申し訳なく思う気持ち、罪悪感もあった。

震災発生から約3日後、加古川市から電車に乗って自宅マンションにベトナムに帰るためのビザ申請に必要な書類等を取りに戻った。自宅の最寄り駅から3～4駅手前までは電車で行くことができ、そこからは5～6km歩いて自宅へ向かった。その道中は時間旅行をしているような感覚であったとハンさんは表現している。ハンさん達が未来から来た人で、地震の跡というよりは過去の戦争の焼け野原を歩くような、電車の中だけはきれいで、自分

たちもお風呂に入ってきちんとした服装をしていて、電車の速度は遅く、何度も停車しながらの運行であり、焼け野原の景色をゆっくり見ることができ、どこか観光に来ているような感覚があったという。

震災発生後1週間ちょっとは加古川市の四兄妻の実家に三姉、三兄の妻とその子ども二人とともに身を寄せた。神戸市にいても電気、ガスも水も無く、兄の家は焼失しており、しばらくは住めないことがすぐに分かっていたため、家族内では一度ベトナムに帰ろうという話がまとまっていた。当時はまだビザが必要であったが、特別措置として早急に発行してもらえ、航空チケットも手に入った。再入国許可も申請してすぐに出され、2週間も経たないうちに出国準備が整い、ハノイに向けて出国することができた。ベトナムへの入国も普段以上にスムーズであった。諸手続は空港で行なったのか入管で行なったのか、兄らが動いたため記憶が定かではないが、とにかくスムーズだったことは覚えているそうである。ベトナムでは最初の1カ月はハノイの長姉宅、その後の約半年間はホーチミンの二姉宅での生活となった。

仮にハンさんらが日本人であり、日本にしかいる場所がなければ何らかの形で生活することはできたのだと思うが、彼女らにはベトナムに避難するという手段があり、避難しやすかった。

震災から半年後に、先に帰国していた母、三姉から、「中央区の神戸駅近くに新築の一軒家（長兄宅）を買ったから早く戻ってくるように」と言われて、約1年後に帰国した。

### 〈震災前後の仕事〉

被災前から、三姉とハンさんは通訳業をしていた。もともとは警察での通訳から始めて、その後検察、裁判等の司法通訳をするようになり、ベトナム語ができるということで、企業や研修センターなどからの依頼も来るようになった。どこにも所属せず個人で営んでいたため、ベトナムへ避難する際にも仕事があるから離れられないということではなかった。ベトナムで生活した約半年間は、家庭教師や神戸にいる頃からの知人が運営する日本人相手の料理教室の通訳をしながら、ベトナム語を学び直すという意味でホーチミン市のベトナム語コースを有する大学で勉強して過ごしていた。その頃に現在の夫や今も付き合いのあるベトナム人コミュニティ研究者と出会っている。帰国後は震災前に行なっていた通訳業を再開、継続した。

他の兄弟らの仕事は、震災の前後とも父親から引き継いだ貿易業であり、四兄を中心に家族で営んでいる。商品を置いていた倉庫は神戸市の北に位置するS市にあり、市内中心部にあった店舗も物が多少壊れた程度で地震による被害がさほどなかった上、主な取引先はベトナムであり、取引に支障はなかったため、数週間後に営業を再開することができた。

## 3. 震災からの復興

### 〈個人的な生活の立て直し〉

震災から半年後に帰国した時は、家を建て直すというところがぼつぼつという感じであった。兄もその頃に自宅を建て直した。ただ、本当に家はぼつぼつで、この隙間はいつ埋まるんだろうと感じていたそうである。市場もまだプレハブで営業している状態であった。

半年経って兄が自宅を建て直すに当たっては、ドイモイ以降両親が始めたベトナムを相手にした商売を、その社名ごと四兄が中心となって順調に引き継ぎ、ある程度の蓄えがあったことに加え、取引相手であるベトナムには震災の影響はなく、品物さえあればすぐに仕事を再開できる状況であったため、他のベトナム人らよりは資金を工面しやすかったとハンさんは考えている。四兄は当然ローンを組んだが、三姉もハンさんも仕事を持っており、自らの預貯金を拠出し、両親の蓄えも自宅再建資金に充てることができた。

自宅マンションは半壊にも該当しなかったため、市からの助成等は受けることはなかった。四兄の家は全焼したので罹災証明を受けたはずとのことである。

### 〈地域の復興、ベトナム人コミュニティの復興〉

最も大変な時期にハンさんは日本に居なかったうえ、小学校からずっと日本人社会で育っていたため、ベトナム人といえば、母親か兄らの知り合いだけであり、ハンさん自身が直接関わったことがないので、ベトナム人関係でどうだったかについては他者から聞いた話程度でしか分からない状態である。

周りの日本人たちも復興途中ではあったが、ハンさんが住んでいた地域の被災状況はさほど大きくはなく、電気・ガス・水道が通れば元の通常の生活に戻ることができる状態であった。ハンさんはすぐにベトナムに行き、半年経って帰国してからは被災地以外に住む友人と震災前と同様に食事に出かけるなど、遊びや仕事をするうえでは普通に暮らせていた。

もちろん長田区方面に行って街並みを見ると、まだ復興していないと感じることはあり、1年経ってもブルーシートの屋根があったり、燃えたり崩れたりした家が残っている光景もあったが、ハンさんの日常生活は普通に送ることができていた。

### 〈震災の経験による影響〉

ハンさんの家族は全員無事で、亡くなった人はいなかったが、友人を1人震災で亡くしている。数の問題ではなく、1人であってもトラウマにはなっているとハンさんは語った。揺れた時の恐怖が今でも残り、敏感にはなっているそうである。それ以降、大きな揺れを経験していないため、そうなった時にハンさん自身がどうなるかはわからないが、震災でどういう状況になったのか、どんな恐怖があるのか、大変な状況からどう免れたかなど、その時の経験を誰かに細かく伝えることはできる。思っている以上に悲惨なことではあるが、乗り越えられないことなく、後々になってみると乗り越えることができた、という感覚はあると話していた。

東北の震災の時、仙台在住の五兄は被災した。五兄は一軒家に住んでおり、ハンさんは当然心配はしたものの、むやみやたらに心配することはなく、テレビなどの情報を見て、「兄の家は高台だからふもとまで津波が来ても兄の家は流されず大丈夫だろう」など冷静に考えることが出来た。連絡をとるときも、今どういう状況か尋ねて「家が半壊」と聞けば、「家に残ってはいけない、崩れる可能性があるから」「余震に気をつけるように」とか「水、ガス、電気はどうか」、「必要な食料はあるのか」、「結局届くのに1カ月かかる可能性があるから送るよりは支援物資をもらった方が早い」など、神戸の震災を経験したからこそ、現場の状況を予測しながらやり取りすることができた。当時の経験があったからそのように思えたのだと思う。

ハンさんにとってあの経験はやはり大きかったそうである。日本に住んでいる以上、地震は起こる。ベトナムでは地震は起きないが、もし起きれば震度3でも家は全て崩れるだろうと思えるくらいの継ぎ接ぎの多い脆い家の造りである。「地震のない国でよかったね」とハンさんはベトナム人と話をすることがあるが、地震のない国の人に地震の体験を話しても、ただ怖いという意識しかなく、信じられないという話になる。ハンさんは、そういう人たちに「地震があるかもしれないから気をつけて」という話は敢えてしない。ベトナムに住んでいれば経験しなくてもよかったことかもしれない。正直、経験したくないことである。本当に怖かったし、友人を亡くすような辛い思いはしたくない、あんな経験を人生で二回も三回もしたくはないとハンさんはいう。そして、もし次にそういうことになったらどうなるだろうと恐怖を感じていると語った。しかし日本に住まざるを得ない。阪神淡路大震災を経験していたからこそ、東北で身内が被災しても少しは冷静に判断して連絡を取り合えたという点では意味があったとハンさんは考えている。

## 3. おわりに

ハンさんは、震災の体験が自分に与えた影響を以下のように語った。

震災が起きたその日のうちに、行列に並ぶこともなく湯気が立ち上る温かい風呂に入れて幸せだった半面、被災した人々への罪悪感もあった。あの経験がなかったら、幸福な思いと罪悪感を同時に抱くような、複雑な考え方をすることはなかったかもしれない。あの経験以降、両面から物事を考えられるようになった。何か苦難があった時にこの状況でよかったと考えるのと、もしこの状況でなかったらどうかと考えるのと両方を考えることができる。あの経験が生き方、考え方の要素のひとつになっている。

このように、被災の衝撃は受けたものの自身は安全な場所を有し、難を逃れることが出来る幸運に恵まれても、サバイバーズ・ギルトに苛まれるという苦痛を抱いていた。ハンさんは時間の経過とともに自己を客観視し、多角的な思考を得られたと認識するなど、気持ちの整理ができていようだが、被災して間がない時期は、被害がさほど大きくなかった人々、逃げ場を持っていた人々の心も深く傷ついていることを考慮して、慎重に言葉を選ぶ必要があると考える。

## 付記

本調査は 2015 年 9 月 10 日にハンさん経営のレストランにて実施した。

(瀧尻 明子)

## VI 震災によって獲得したベトナム人としての誇り ：思春期にベトナム難民として来日した女性の生活史

### 1. はじめに

ランさん（仮名、40 代前半・女性）は、6 年前に帰化して日本国籍を取得した。現在、夫・長男と一緒に暮らしており、長女は数年前に結婚して独立した。ランさんの夫は被災前まで貿易業を営んでおり、ランさん自身は喫茶店でアルバイトをしながら生計を立てていた。震災によってランさんの夫は会社を廃業し、しばらくの失業期間を経た後、ハローワークを通じて運送業に転職した。一方、ランさんは震災後 3 年間無職の状態だったが、神戸定住外国人支援センター（以下、KFC）への就職をきっかけに今日まで同胞の支援活動に携わっている。

### 2. 日本生活のはじまり

#### 〈難民施設での暮らし〉

サイゴンで生まれ育ったランさんは 1980 年代はじめに家族と一緒にベトナムを出国した。1 ヶ月間の漂流の後、シンガポールに行く途中のパナマ船に救出され、徳島県小松島市に上陸した。当時、ランさんは 9 歳でベトナムの小学校 4 年生を修了したばかりだった。

日本上陸後、ランさんの家族は約 1 年間、長崎県西海市大瀬戸町（当時の西彼杵郡大瀬戸町）の日赤ベトナム難民援護施設大瀬戸寮<sup>5</sup>に入所することになった。大瀬戸寮は山深い場所にあり、買い物がかしにくい環境だった。そのため班ごとの代表者がバスに乗って定期的なまとめ買いをしていた。

当時、最も困っていたことは言語で、日本語を毎日勉強していたが、習熟は容易ではなかった。ランさん家族は当初、遠縁の親族が暮らすアメリカ合衆国への第三国定住を希望していたが受け入れられず、パナマか日本のいずれかの選択を余儀なくされた。当時、パナマについての情報をほとんど持ち合わせていなかったことから、ランさんの家族は日本で定住することに決めた。

大瀬戸寮を退所した後、ランさんの家族は姫路定住促進センター<sup>6</sup>に入所することになった。姫路定住促進センターで日本語を 3 ヶ月間勉強し、姫路市内の小学校に 5 年生の 2 学期から通い始めた。この小学校にはベトナム難民の子弟が 15、6 人おり、毎日 1 時間、正課の授業とは別に日本語の授業を受けていた。

#### 〈難民施設から地域生活へ〉

半年ほど姫路定住促進センターで暮らした後、ランさんの家族は父親が斡旋された就職先がある香川県丸亀市へ移住することになった。ランさんが小学校 5 年生の終わりか小学校 6 年生の 1 学期の頃のことだ。ランさんの父親の就職先は船の浮きを作る会社であった。世帯として独立していたランさんの兄弟たちも雇われ、3 世帯がまとまって丸亀市に移住することになった。当時の日当は 3,800 円で高賃金ではなかった。それでもカトリック丸亀教会の神父が自宅から会社までの送迎を引き受けてくれるなど、なんとか暮らしていくことができた。丸亀市に移住した当初の住まいは狭小で古びた文化住宅のようなアパートだったが、雇用主の積極的な働きかけにより香川県善

5 1980 年に日本赤十字社によって設置されたベトナム難民の援護施設。1995 年に閉館した。同所は 2001 年から音楽の再生装置およびレコードを展示する「音浴博物館」となった。

6 日本へ定住を希望する人への日本語教育、健康管理、就職あっせんを目的として、1979 年 12 月に兵庫県姫路市に「姫路定住促進センター」が設置された。運営主体は難民事業本部。

通寺市の市営住宅に転居することができた。

### 〈神戸への移住〉

ランさんの家族はしばらく善通寺市で暮らしていたが、近くにベトナム人がいないことを両親が寂しがったため、姫路定住促進センターに戻るようになった。同センターで再び暮らすようになって3ヶ月が経過した頃、大瀬戸寮で通訳として働いていた知人が学校・住宅・職探し・生活保護等の各種手続きを手伝ってくれることになり、1983年1月に神戸市須磨区に引越することになった。

ランさんは小学校6年生の3学期になってA小学校に転校した。卒業後、地元のB中学校に入学したが、須磨区から長田区への転居に伴ってC中学校に転校した。不慣れな言語環境に加え、転校が度重なり、ランさんは学校の授業についていくことが非常に大変だった。また、当時は日本語をほとんど話すことのできない親族や同胞の通訳として病院などに同伴することが多く、中学校は欠席しがちだった<sup>7</sup>。

中学時代にはベトナム人であることを理由に学校でいじめられるなど、差別を経験することもあった。病院などで自分の本名が呼ばれる時、周囲の「外国人だ」というまなざしが辛くて仕方がなかった。ベトナム人として誇りを持つことはできず、中学生の時に通称名を用いるようになった。以来、ずっと通称名を使って生活するようになった。学業に困難を抱えていたランさんは「高校に行ってもちんぷんかんぷん」だと判断し、「髪の毛を触ることは小さい頃から好きだった」ことから美容専門学校に入学することになった。

## 3. ランさんの被災体験

美容専門学校を卒業した後、ランさんはベトナム難民の夫の結婚し、ふたりの子供を授かった。被災したのは日本での暮らしが始まって14年目の時だった。当時、夫（20代後半）と幼い長男・長女の4人暮らしで、須磨区にある12階立ての市営住宅の8階に住んでいた。

### 〈被災直後の状況〉

阪神・淡路大震災は明け方に発生したとき、ランさんは偶然起きていた。前日、ランさんが暮らす市営住宅の一室が全焼する火事があり、収束したのが明け方の3～4時頃だったからだ。被災直後は火事の影響だと思ったが、窓から外を見たら揺れていて地震だとわかった。停電していたため部屋は真っ暗だったが、長男のおもちゃについていたライトを頼りに車の鍵を見つけて外に出た。エレベーターも停電して動かなかったため、8階から階段で降りた。前日から火事の対応をしていた消防士が、そのまま市営住宅の住民に対し避難誘導をおこなっていた。

ランさんは「まず親のところへ行こう」と車で移動したが、信号機もすべて止まっていた。ランさんの自宅から車で数分のところにある実家のマンションは地震によって傾いてしまっていた。ランさんが到着する前に両親はマンションの外で待避しており、周囲は人で溢れていた。ランさんはひとまず車に両親を乗せてJR鷹取駅前に向かった。駅前で2～3時間待避していると駅員から鷹取中学校へ避難するよう指示を受け、ランさん家族はそれに従った。ランさんの父親は鷹取中学校で避難場所を確認すると、すぐに同胞の救援活動へ出かけて行った。一方、ランさんは急いで自宅に戻って貴重品とありとあらゆる食材を持ち出した。

### 〈避難所での生活〉

避難所となった鷹取中学校では、カセットコンロで火を焚いて、ベトナム人に炊き出しをした。子どものミルクが必要だったので、学校の先生に頼んで持ってきてもらった。ダンボールで壁を作って皆で火を囲んでいた。震災から2日目に鷹取中学校を出て、車で姫路に行き、非常食のカップラーメンなどを購入した。その後、ハリー神父<sup>8</sup>を頼って一晩を姫路で過ごし、翌日、鷹取中学校へ戻った。ランさんの自宅は半壊で家の中が散乱しており、すぐに住める状態ではなかった。また、実家は全壊であった。そのため約1ヶ月間、鷹取中学校の避難所で暮らしたが、「これはアカン」と思って家族でベトナムに渡った。しかし、しばらくの滞在の後、「このまま逃げていたらアカン」と思い直し、鷹取中学校の避難所に戻った。その後、カトリック教会の信者が提供してくれた土地にテントを張っ

7 ベトナム難民に対する通訳の取り組みは学校から推薦され、神戸市から表彰されることになった。学校を欠席しがちだったのに、学校で通訳の活動が評価されたことをランさんは笑いながら振り返った。

8 カトリック淳心会司祭。本名はヘンドリックス・クワードブリット。ハリーは神父の通称。姫路定住促進センター名誉所長。

て暮らした。

ランさんの家族は片付けに一定の目処がついたため、自宅に戻るようになった。実家は全壊だったため、両親や兄弟の荷物を預かって自宅の一室を倉庫代わりにしていた。しばらく半壊状態の自宅で暮らしていたが、余震のたびに子どもたちが恐がって泣いたため、1年後に引越することになった。一方、両親は仮設住宅がなかなか決まらず最後まで避難所暮らしであった<sup>9</sup>。

## 〈被災生活の苦勞〉

被災生活の中で最も苦勞したことのひとつが、子どものおむつや粉ミルクを溶かすための湯の確保だった。また、外国人であるがゆえに被った傷もある。ランさんは当時を振り返り、「やっぱり差別問題が一番いやだな、というのがある」と述べ、今でも記憶が強く残っていることを強調した。

当時、生きるか死ぬかの瀬戸際であるにもかかわらず、被災した日本人たちから「自分ら国に帰りいや」「なんでここおるん」などと罵詈雑言が飛んだ。配給に並んでいた時に「あんたら（母国に）帰りいな、なんであんたらここに並んで（物資を）もらいよるん」と言われ、追い出されてしまったこともあった。

被災後しばらくすると、日本語の生活情報は多く発信されるようになったが、ベトナム語のそれはほとんどなかった。したがって、ランさんは親族内の通訳担当者として多忙をきわめた。当時、南駒栄公園にはベトナム人だけが避難していた。しかし、指定避難所ではなかったため、情報難民化しやすい状況に置かれていた。後に自衛隊の支援が入るようになったが、しばらくは同胞同士の助け合いに頼らざるを得ない状況があった。

当時の状況についてランさんは「狭い考えの人がいて、分かち合いの精神がなかった。みんないっぱいだったとちゃうかな」と回顧した。もちろん、日本人たちから親切な行為を受けることもあったが、ランさんの感覚では「差別する人の方が目立っていた」。

当時、神戸のベトナム人による犯罪が目立つようになっており、ひとりが犯罪行為に関与するとみんながそのようにみなされるような雰囲気があった。地域では「ベトナム人は〜だ」という紋切り型の言い方がはびこるようになっていたが、ランさんは「イメージで一緒にされることがすごく嫌だった」。こうした偏見は震災前から存在していたが、震災後さらに増幅したとランさんはみている。当時の生活について、ランさんは「開き直らないと生活ができなかった」と述べた後、しばらく厳しい表情で沈黙した。

## 〈ベトナム人アイデンティティの確立〉

ランさんに転職が訪れたのは1998年である。臨時職員としてKFCに勤めるようになった。ランさんは、KFCが救援活動をしていることを知っていたが、当初は興味がなかった。カトリック信徒として日曜日のミサには行くものの、物資をもらったこともなく、KFCとの個人的なつながりはなかったからだ。

そもそもランさんは外国人が集まることに興味がなかった。むしろ「今まで差別されて生きてきたから、ベトナム人であることを隠してきた」。震災当時「自分がベトナム人であることが嫌やった」と述べるランさんだが、KFCで働き出し、他のベトナム人と出会うことで自分の出自を受け入れられるようになった。ランさんはベトナム人コミュニティに仲間がいることに改めて気付かされ、「堂々とベトナム人やと言えるようになった」という。KFCとの関わりの中で、ランさんは「なんぼ日本名を作っても、片言の日本語で訛りも強く残っている中で完璧な日本人にはなれない」ことを悟った。そして「ベトナム人でもええやん」と自己の出自を素直に受け止めることができるようになった。当時、ランさんはベトナム語より日本語の方が得意だったが、通訳を頼まれることも多くなったことから、その仕事を積極的に引き受けるようになった。

ランさんは後にKFCの正規職員になり1年間勤務したが、体調を崩して退職した。体調が回復してからは、たかとり救援基地（現在のたかとりコミュニティセンター）のスタッフとして働き始めるようになり、現在に至っている。「いまはベトナム人だと言えるし、誇りももっているし、自分の子どもたちにも堂々とそのことを伝えている」。一方、最近になってベトナムから「呼び寄せ家族」として来日するベトナム人の子どもたちは、ランさんと同様の生きづらさを繰り返し経験しているという。彼らのなかには、かつてランさんがそうだったように「親と一緒に歩きたくない」「親と同じご飯を食べたくない」という態度を示す者が少なくない。こうしたことからランさんは「ベ

9 ランさんの両親は後に須磨区桜木町の仮設住宅に入居することが決まったが、市営住宅に転居するまでに3年間を要した。

トナムと日本の二重文化の壁は今でも続いている」と考えている。

### 〈「復興」の困難〉

ランさんの夫は震災により、営んでいた貿易業を廃業せざるをえなくなった。震災から2年後、ランさんの夫はハローワークを通じて運送会社に就職した。大型免許を取得し、トラックの運転手として生計を立てることができるようになった。一方、ランさんは先述した通り、KFCをはじめ、同胞の支援にかかわる仕事に従事するようになった。ランさんによれば「自分たちは日本語ができたので、仕事が見つかったけど、震災で職を失った人のなかには、いまだに職がない人もいる」。事実、ランさんの父親と兄は震災後、現在まで失業したままとなっている。彼らの主要な雇用の受け皿であった製靴メーカーが震災によって半減してしまったことも要因として大きいという。

また、ランさんは「震災で家族を亡くした人は時間が止まったままだよに見える」という。街並みがいくら復興しても家族を亡くした人の表情を見ると、「ここに震災があったことを思い出す」と語った。ランさんはインタビューの最後に「よく『復興』ということばを使うけど、それは街並みのことであって、犠牲者のあるところには復興はないかもしれない。それが震災の証だと思う。だから忘れてはいけないと思う」と締めくくった。

## 4. おわりに

ランさんは1998年に財産をつぎ込み、家を購入した。そのことでしばらくは経済的に厳しい状況にあったが、この2～3年ぐらいでようやく震災前の安定した生活を取り戻すことができるようになったという。ランさんにとっての震災は、それまでに受けてきた差別をさらに露骨に感じさせるものになった。その意味でアイデンティティの危機をもたらす経験になったといえるだろう。しかし、震災後の混乱した状況の中でベトナム人コミュニティのつながりの重要性を改めて確認し、そのことの意義はKFCをはじめとする外国人を支援する組織への関わりの中で強化されていった。

震災前から震災直後においては自身の出自を前向きに捉えることができなかつたランさんだが、KFCの仕事を通じてベトナム人としての誇りを取り戻すことができた。そして、ランさんは今日まで一貫して同胞と共に歩みながら彼らの支援に尽力している。

## 付記

ランさんへの聞き取り調査は、2015年7月31日にたかとり教会で実施した。

(白波瀬 達也)

## Ⅶ ベトナム人としてのアイデンティティの再構築：震災をきっかけに

### 1. はじめに

ワンさんは、30代半ばの女性である。出生地はホーチミンシティであり、0歳の時に、父ほか家族とともにボートで出国した。海上で救助され、その後日本に到着。父の判断で日本での定住となり、家族で一時滞在施設と定住促進センターに入所した。その後、父の仕事の関係で国内を転々としたのちに長田に移住し、現在に至る。8人兄弟の7番目である。

今回のインタビューでは、ワンさんの幼少期からのライフヒストリーを聴取した。よって本節では、ワンさんの震災経験を含む、日本における幼稚園以降のライフヒストリーを記述し、最後の部分でワンさんの生活における震災経験の意義を考察する。

## 2. ワンさんの日本におけるライフヒストリー

### 〈幼稚園・小学校の時ににおける生活のしづらさ〉

ワンさんは現住地である長田区での生活が最も長く、幼少期から過ごしている。幼稚園の時は、周囲は日本人のお母さんばかりなのに、自分には親せきの人（ベトナム人）が保護者として来ていることが嫌で通園したくないこともあった。

また小学校の時は、周囲の子どもから「ベトナム（人）なのにどうしてここにいるのだ！」や「ベトコン」<sup>10</sup>など差別的なことを言われた経験がある。それが嫌で法的に通称名を使えるようになる16歳を待ち焦がれていた<sup>11</sup>。16歳までは、クリーニング店を利用する際など差しさわりのない時は「通称名」を使っていた。もっとも、16歳以降も外国人登録証明書がない時はベトナム名で過ごすことが求められ、病院などで名前（ベトナム名）を呼ばれた時に感じた、周囲からの「冷たい視線」は、未だに記憶に残っているとのことである。これらの差別的な扱いから、常に自分がベトナム人であることを隠しておきたかった。

### 〈中学校での生活（生活のしづらさ・進路選択・被災経験）〉

中学校に進学するものの、このような差別的扱い、いじめは続いた。同じ中学校に在籍していたベトナム人の先輩（親せきを含む）からは、これらの差別的扱い、いじめを受ける経験は「誰もが通る道」だと言われた。

中学卒業時、大きな転機を経験することになる。進路選択と震災である。震災が起きた1995年1月の段階でワンさんは中学生だった。いうまでもなく進路選択を迫られる時期だったが、高校を受験するか否かで迷っていたところ、先生から「県立高校の農業科の推薦が来ているけどどうする？」と問われた。競争倍率が高いため「ダメモト」で受験したところ合格した。しかし農業科に対する興味は「なかった」とのことである。

このような形で進路選択を進めていたところ、1995年1月17日早朝、震災が生じた。当時住んでいたアパートから脱出し、親せき一同とともに中学校へ避難し、避難生活を余儀なくされた。親せき間で助け合いながら生活していたが、そこでも差別的な扱いを経験する。「ベトナム人だから」という理由で、避難先の中学校では数週間程建物内に入れない生活が続いた。一方、中学校の友人は「ベトナム人ではなく、日本人」なので建物に入ることができ、ある程度物資が整った中で避難生活を送ることができた。このような扱いの違いを目の当たりにし、差別的扱いを露骨に感じた。さらに避難所では日本人から差別的な言動をうけた。避難所で物が無くなると「お前らがやったのか」など疑われることがあった。しかしこのような差別的なまなざしに対しては、「違う。私たちはこのような状態でここにいたから、そんなことはやっていません」と、しっかり主張していた。

もっとも差別的な扱いを受けただけではなく、ボランティアの人と仲良くなって一緒に遊んだり、励ましてもらったり、またどこかに連れて行ってもらうような経験もした。

### 〈高校での生活〉

震災被害から徐々に復興が進むなか、ワンさんは高校に進学する。前述のとおり農業科に進学したワンさんは、ここで食品加工（製造）について学ぶ。別の科（畜産科）で生産された生乳から牛乳を作ったり、ドーナツ、マヨネーズ、味噌といった食品を製造することで、その製造方法について学んだ。これらの「作品」は、文化祭の時に販売した。

ワンさんはこの時、市が用意したプレハブ住宅が入手できなかったため、神戸市内にある姉宅から通学していた。しかしワンさんが「ヤンチャ」をし、結局は高校2年次に、父母宅に引き戻された。

このような経験のあと、ワンさんは再度転機となる経験をする。通称名にこだわっていた中学の時とは異なり、「私はベトナム人なんだ」と言えるようになった。その転機とは、ラジオへの出演である。当時FMわいわい<sup>12</sup>で放送していた「ハイスクールベトナム」という番組に出演した際、ベトナム人であること、それに伴う差別的な経験、

10 「ベトコン」と言われた時は意味が分からなかったので帰宅後家族に尋ねたところ、家族から、「馬鹿にされているのだ」ということを告げられた。「ベトコン」とは、南ベトナム解放戦線に対して、アメリカや南ベトナムが用いていた蔑称である。

11 ここで「法的に通称名を使える」とは、外国人登録証明書に通称名を記載可能になる、という意味である。なお外国人登録証明書は既に廃止されており、2012年からは、新たに「在留カード」となった。

12 神戸市長田区にあるコミュニティFM放送局。阪神・淡路大震災をきっかけに設立され、多言語により放送を行っている。

ベトナム名ではなく通称名で生活したいといった心情を吐露したところ、番組のプロデューサーから「両親に対して失礼極まりない」「ベトナム人として胸を張って生きていくように」と諭された。そのプロデューサーは、関西地方で放映されていた人気テレビ番組「痛快！エブリデイ」<sup>13</sup>のプロデューサーでもあり、この人の紹介で劇団に所属するようになった。劇団のある大阪・天王寺まで通うようになり、その後、劇団が仮設住宅に訪問して演劇を上演する際は、日本語とベトナム語の通訳として活躍するようになった。この経験をもとに、週刊誌に取材されるようになり、ベトナム人として生きていくことに対して前向きになっていった。

さらにワンさんは一時的な帰国を果たすことになる。高校卒業時、ワンさんは就職活動をおこなっておらず、卒業式にも出席していない。その一方で、高校卒業に必要な単位をすべて取得した後、教育委員会による認可のもと<sup>14</sup>、ベトナムに3ヶ月間留学した。このあと19歳、20歳の時にも訪越し、20歳の時は両親を連れての訪越を果たした。このように複数回ベトナムに渡航することによって、さらに自分のルーツに対して自信を持てるようになってきた。

### 〈現在の生活〉

現在は日本人の夫と結婚し、2人の子どもとともに生活している。現在の生活については「安定している」と話している。

心残りの点の一つがある。ベトナムと日本の架橋になるという夢があったが、ベトナム語の読み書きができないことから、現段階ではその夢の実現には至っていない。

そして現在の心配事としては、「娘が自分と同じような差別的な扱いを受けないか」ということを挙げている。娘は保育園で自分がベトナム人であることを隠すことなく話しているため、そのことが仇となって、いじめられるのではないかと心配している。

## 3. おわりに：ワンさんにとっての震災経験の意義

以上、ワンさんの震災経験を含む日本でのライフヒストリーを述べた。今回のインタビューでは、震災そのものによってもたらされた苦しさよりも、震災を通じてより明らかになった、ベトナム人に対する差別的な扱いへの対処や自分のアイデンティティに対する葛藤やその対処について述べられた。

近年「ヘイトスピーチ」を代表例とする、一部の外国人住民を排除しようとする動きがインターネット上や現実の場面で盛んに行われている。時代は異なるが、ワンさんも周囲の日本人からの差別に相当に悩んだのだろう。一般に難民は、自国政府によって排除され難民としての生活を強いられ、さらに避難先国政府・住民からも排除されるという「二重の悲劇」を経験する傾向がある。ワンさんもこの「二重の悲劇」を経験したのだろう。それゆえベトナム人としてのアイデンティティに悩み、だからこそ通称名の使用にこだわったものと思われる。

震災前後を境に、そのようなこだわりに対する変化が見られる。避難所での日本人による差別的なまなざし（窃盗の疑い）に対しては、「違う。私たちはこのような状態でここにいたから、そんなことはやっていません」と主張するようになっており、後のラジオ出演による出会いから始まる演劇活動では、ベトナム語－日本語の翻訳を務めるようになっている。さらに近年では、ベトナムと日本の架橋になるという夢が語られた。幼稚園の時に、ベトナム人の親せきが保護者として来ていることが嫌と思っていた時期から比べると、大きな変化と言っていいたいだろう。

なぜこのような変化が生じたのだろうか。この点は本インタビューの語りでは確認できないが、ワンさんのどこかに「なぜ」という疑問があったものと思われる。それはおそらく「なぜ差別されるのか」「なぜベトナムだといけぬのか」そして、「なぜ日本でも排除されるのか」などの「なぜ」だろう。しかし震災で経験した不合理さ・被差別経験をきっかけに、封印していた「なぜ」が吹き出し、その後のラジオ番組のプロデューサーによる諭しもあり、ベトナム人としてのアイデンティティを再確認した・できたのではないだろうか。

阪神・淡路大震災のような自然災害は、それまでに築いてきたものを一瞬に奪う。この点はワンさんにとっても同様であろう。その一方で、多くのものを得るきっかけにもなり得るのではないだろうか。

13 当時、関西テレビ放送で放送していた情報番組。

14 このような事例は、当該教育委員会では初めてであり、少なくとも当時においては、異例のケースだった。

## 付記

本調査は 2015 年 8 月 10 日にワンさんの自宅で実施した。

(荻野 剛史)



写真 2 新長田駅若松町 (1995 年 1 月 18 日撮影)  
提供：神戸市



写真 3 火災跡の様子 長田区 (1995 年撮影)  
提供：神戸市

## 第2部 二世たちの震災の記憶

---

難民の二世とは、難民である親から、親の母国以外の定住先で生まれた子どもたちのことだ。1980年代にその多くが来日したベトナム難民の、その子どもとなれば、1995年の阪神大震災の発災時には、その多くが小学生だった。

自分たちが必死の思いで母国から逃れ、受け入れ先で定着しようと苦闘していた一世たちが直面した震災の経験は、実に多様であり、またその生存戦略も様々であった。それに比べると、小学生だった二世たちが経験した震災は、思いの外、「共通点」が多いように思われる。

語りから表れるのは、彼らの多くが、震災によってもたらされた「非日常」を、時には楽しんでさえいるように思えることだ。学校に行かなくてもいいこと、避難所では炊き出しがあったこと、公園で生活すること、いつも開いているコンビニのシャッターが閉まっていたこと……。こうしたことの一つ一つが彼らにとっては、「驚き」であり、「楽しさ」であったかのように伝わってくる。

では、震災によって彼らにもたらされたものとはなんだろう。語りの中で、「震災の影響はなかった」という人が複数いる。実際に身近に亡くなった人がいなかった場合、震災からの立ち直りも早かったようだ。しかし同時に、彼らの中には、現在は親の母国であったベトナムに生活拠点を移している者がおり、日本からの移住を、「震災の影響かもしれない」と語る。また、ボランティアに参加することを「震災の影響かもしれない」と語る。震災は、彼らが自分の現在を客観的に振り返る上での、ひとつの指針になっているのかもしれない。

(長谷部 美佳)



写真4 湊川公園より西を望む（1995年1月17日撮影）

提供：神戸市

# 1 小学生だった頃の震災経験：ベトナム難民二世として生きること

## 1. はじめに

タンさんは、1980年代後半に生まれた男性で、日本で生まれ育ったベトナム難民二世である。難民二世として日本社会で暮らす中で、これまでの人生で他者から偏見の眼で見られることがあった。自分がベトナム出身であることを他者に伝えると、様々な質問をされ面倒だった。そもそも日本生まれなので、ベトナムのことを聞かれても回答できなかった。なぜベトナムなのかと聞かれても、「自分も分からない」のに、友人も先生も質問をしてきて面倒だった。そのため長い間、「ベトナム人」であることをさらけ出すことができなかった。その後、自身が「ベトナム人」であることをさらけ出さないと自分のしたいことができなかったのを、身近な他者に自身が「ベトナム人」であることを伝えた。それが「かっこいいやん」と自分の個性のひとつであると受容される経験、打ち明けた仲間が「俺の嫁も韓国人やで」と答えてくれたことなどをとおして、現在は、ベトナム人であることを肯定的に捉えている<sup>1</sup>。

彼はこれまで何度もインタビューを受けてきたことがあるが、震災に関するものは珍しいという。神戸長田で生まれ育った彼は、将来音楽で生計を立てることを目指して、都内の飲食店兼ライブハウスでアルバイト生活しながら一人暮らしをしている。アルバイト先では一流の音楽に触れることができるので、自分の音楽づくりの参考になるという。

## 2. 小学生なりに感じたこと

彼が被災したのは小学校1年生の頃である。当時は団地で家族と暮らしていた。震災後2～3ヶ月間を仮設住宅で暮らした後、もとの住宅に戻って暮らすことができた。しかし建物の補修が必要なため、ある程度の期間は外壁部分に足場が組まれた状態が続いていた。他の日本人もそのようにして戻っていたようであった。学校が足場を組みながら再開されたのは、被災後数ヶ月～1年ほど経過してからであったと記憶している。学校が再開したのは2年生からだったので、1年生の3学期はまともに勉強していなかったということ、このインタビューをとおして彼は思い出した。小学生なりに震災時に経験したこととして、彼は次のように語ってくれた。

震災は早朝のことだったので、最初はまるで夢をみているようだった。皿が割れる音がし、叫び声も聞こえたので両親が喧嘩をしているのかと思った。しかし、起きてみると母が大声で自分を揺すっていた。部屋中にモノが散乱し、靴箱の靴は落ちて、トイレの水が流れないのでバケツに用を足すことになった。ガラスが散乱していたので外にでることになった。外に出ると家が燃えていて驚いた。

当時、タンさんは小学校1年生で、震災経験は未体験のイベントのようであった。炊き出して食事をしたり、宿題をする必要がなかったり、先生が訪ねてきて優しくしてくれたりといった意味で、緊急性よりも「面白い」体験だった。避難時もたまにしか会えない従兄弟たちと毎日遊ぶことができたということを感じている。避難時、どうしたら良いのか分からなかったのを、思いつきで学校に行ってみた。しかし学校は人でいっぱいだったので、人の流れに乗って別の地域の中学校へ行った。子どもながらに周りの景色をみて、どうせこれから行こうとしている学校も倒壊しているのでは、と思いながら他の人について行った。どこに行けば分からず、周りの人もよく分かっていなかったのだが、とりあえず人の流れについていった。とにかく大きな場所に行くことにした。

被災した当初は、家に帰る見込みもなかったのを、いったいこれは「何待ち？」と思いながら過ごした。母たちの会話の様子からうかがい知ることができたのは、情報が十分ではなく、どうしたら良いのか、これからどこに行ったら良いのか分からないということである。そもそもベトナム語の情報自体がなかった。行き場がなかったことが

1 彼は「俺の歌」という楽曲を人前で歌いたかったので、自分のことをカミングアウトすることを決意した。音楽仲間は、自分が「ベトナム人」であることに対して友人や先生とは違う反応を示してくれたことが嬉しかった。これまでは訝しげに思われていた「ベトナム」であることは、こちらでは拍手をもらえることになるのだ、ということが嬉しかったと語る。場合によっては仕事にもなるし、なぜ隠していたのだろうとポジティブに考えるようになった。これはそういう機会を提供して下さった方々のお陰でもあると述べている。「ベトナム人」であることの特異性は日本では「武器になる」ことが分かったが、たとえばアメリカでは多様な人々がいることは、当たり前のことであり武器でも何でも無いことにも気がついた。このように視野を広げてみた場合、やはり自分は音楽で勝負をしたいと思うようになった。彼はアメリカのサンティエゴ、ブラジル、スペインを訪問し、ベトナムにも留学するなど20歳代前半に世界を見聞し視野を広げた。20歳以降は日本国籍を取得し、「日本人」としてベトナムのビザを取得し、留学生として渡航した。

一番大きな問題点であった。また母からは、ベトナム人に対して、差別的な扱いをする日本人がいたことを聞いた。例えば、自宅から探し出してきた食料を屋外でバーベキューのように調理していたら、「その食べ物は、どこから盗んできたんだ」と言われたこともあった。

まず思いつくのは食べ物にまつわるストーリーである。学校の技術室に、自分を含め多数のベトナム人が避難していた。やがて、その技術室にベトナム人が集まるようになった。そこで彼は激しい空腹を覚え、祖父からカップ麺をもらった。しかし焼きそばの湯切りに失敗してしまい、調理中に落としてしまった。たった2つしかないカップ麺の1つだったので、大変もったいない思いをしたことを覚えている。貴重な食べ物を台無しにしてしまったことを申し訳なく思ったものの、結局、もう一つの麺を食べさせてもらったと語るように、皆の食べ物がない中で子どもは大切に扱われていたことがうかがえる。

支援体制については迅速で、炊き出し、居所、風呂（週に1～2回、男性の日、女性の日があった）などの最低限の支援自体はあったので、生死にかかわるほどに困ったことはなかったと当時の様子を振り返っている。生活再建にあたって、自衛隊の人たちの助力（炊き出しや風呂）があったことだけは覚えている。自衛隊が来たら食糧が来るという印象が残っている。当時、食した食べ物としてカップラーメンと炊き出しの豚汁しか覚えていない。当初、食べ物に困っていたのは事実である。ある人がおにぎりを握って1つ1万円で売って怒りをかっていたという話を聞いたことがある。ベトナム語での情報提供は不足しており、もっと欲しかった。

自身が差別の経験をもち、母親からもベトナム人が差別されていることを幼い頃から聞かされていたこともあってか、「わがままではないんですけど」と前置きをしたうえで、ベトナム語での地図や情報がほしかったと語る。震災後、鷹取駅前にはベトナム語も併記された地図が設置されたように、この場所にいけばベトナム語の情報があるということが必要であると考えている。

震災の際、飢えるほどではないが、一時的に食べられない経験をしたため、食に対しては敏感になった。震災の経験が、自分の人生にどのような影響をおよぼしたかということについて、当たり前のことに対して感謝をするようになったとも言う。「もったいない」と思うことが多くなると同時に、自分で必要な分量以上のものも蓄えるようになったという。必要分以上を蓄えておくのは、天災時自分がカップ麺をもらったように、他者に分け与えるためである。震災を契機に、実家では特にカップ麺や水などをストックするようになった。冷蔵庫にある食材もぎりぎりまで捨てずにとっておくようにもなった。特に使うわけではないがライターをもち、多めにとっておくようにした。震災の経験がもたらしたのは、ありがたさであり、明日死ぬかもと考えて今日動くように心得るようになったことである。

被災経験から約20年が経過し、現在東京暮らしの彼は、天災時、大量の水が流入するかもしれないので地下が怖いと感じている。また震災を経験してはじめて地震の恐怖を知ったが、いまだに経験していない津波への恐怖を感じている。災害とは、自分が経験してはじめてその恐怖が分かるのであろうと自身を客観視している。

### 3. おわりに

学校などでの講演経験のある彼だが、日本生まれ日本育ちのベトナム難民二世の彼を、どのように紹介すればよいかと尋ねると、彼はこれまでじっくり紹介のされた方に出会ったことがないという。たしかにベトナム難民二世という紹介のされ方は間違いではなく、彼の言葉でいえば、それを武器にはしている。しかし、日本のパスポートを取得しているように他の日本人と同じで、ベトナム難民というくくりも適切ではないと彼はいう。自分の存在を中途半端であると一方で言いつつも、難民は難民であるというような偏見のまなざし、固定観念だけでは自分のことは適切に理解してもらえないと語る。両親は大変な思いをして日本にやってきたので、難民と自称することに違和感をもたないが、彼自身、両親のような苦勞をしてきたわけではないので、「難民」と呼ばれることに気恥ずかしさを感じる。ただし事実は事実なので、それは伝える必要はあると考えている。

ベトナム出身の日本人、ベトナムに出自をもつ日本人という紹介のされ方はじっくりこず、アメリカのように、〇〇系〇〇人というほうがしっくりくる。彼によるとベトナム系日本人よりも、「日系ベトナム人」が適切であろうと語る。生まれも育ちも日本なので、そちらを重視して「日系」といわれる方が自身のアイデンティティには合致する<sup>2</sup>。

2 こうした彼の複雑な出自については、彼の存在を歌で認めてもらい、「実は自分はベトナム難民二世である」といったようなかたちで公表することができれば、と将来像を語ってくれた。

東京では外国人も多く、関西よりも人付き合いがさっぱりしているところは気楽であるという。他方で、心許して話せる友人はいなく心寂しい部分もある。

## 付記

タンさんの聞き取り調査は、2015年9月10日にタンさんの勤務先付近のカフェで実施した。

(久保 忠行)

## II 「がんばろう、神戸」という言葉との距離

### 1. はじめに

ホアさん（仮名・男性・30代前半）は、ベトナム北部フートー省出身の台湾系の華人である父とベトナム人の母の間に生まれた。両親は1970年代後半にベトナムを出国。香港のキャンプに受け入れられ、しばらく香港で暮らしていたが、第三国定住によって日本へ移住することを決める。ホアさん自身は、日本の姫路市で生まれた。小学校から神戸市に移住し、母と姉二人とともに暮らしていた。

高校卒業後、ベトナムに語学留学することを決心する。幼い頃から日常生活において母の通訳をしており、ベトナム語をききとることはできた。ベトナム留学中に、より実践的なベトナム語を身につける。ベトナムに数年滞在してから日本に戻り、就職。ベトナムと関わりのある企業での通訳や、営業など様々な職を経験し、ニュージーランドに短期滞在するなど様々な経験を経て、26歳から生活の拠点を再びベトナムにうつした。ベトナムでは日系企業で勤め、営業職を担当していた。現在は、自ら新たな事業をたちあげ、社長として活躍している。

### 2. 被災時の状況

被災当時、ホアさんは小学校中学年だった。和田岬の一軒家に母親と姉二人と暮らしていた。地震が発生したときは、母親に起こされて、目を覚まし、慌てて家の外にでた。家の外に出たとき、まだ地面が少し揺れていたように感じられたという。ホアさんの家は、住居が密接している場所に立地しており、40メートルほど家が並ぶ細い道に沿ったところに自宅があった。揺れがおさまった後、その細い道を抜け出し、まず近くの駐車場に待機し、しばらくして近隣の小学校の体育館へ避難した。しかし、結局そこには長く滞在しなかったという。母に連れられて、車で母親の友人たちのところを尋ねてまわった。当時のホアさんにはわからなかったが、ホアさんの母は友人の安否確認をしていたようだ。その途中、家が崩れて道が通れないということにはなかった。

いろいろなところを訪ねたが、最後は南駒ヶ林公園にたどりついた。ホアさんの家に破損はなかったが、被災直後で混乱していたこともあり、あえて公園に身を寄せたのだろう。そこにはたくさんの人が集まっており、炊き出しなども行われていた。その公園に車を駐車し、家族とともに車中で2日間ほど過ごした。その後は、ベトナム人の友人の家を頼りながら、日々を過ごしていたという。

ホアさんは、「子どもの自分は特に苦労したことはなかった、むしろ大変だったのは母親だったと思う」と語る。食べ物も十分にあったし、支援物資のインスタント麺を多めにもらったエピソードや炊き出しがあったことに驚いたことなど、被災中の食生活の思い出は印象深いものとして残っているようだ。

地震発生から一週間ほどが経過して、ようやく自宅に戻った。地震の再発をおそれたホアさんの母は、ベトナムに1～3ヶ月間ほど帰国することを決意する。姉二人は嫌がり、友人の家に預けられることになったが、ホアさんは母に同行して渡越した。そして、ベトナムで数ヶ月ほど過ごしたという。

日本に戻って間もなく、兵庫区の市営住宅に入居することが決まり、引っ越した。被災当時、ホアさんの母は靴工場で働いていた。震災による損傷はなかったため、被災後も同じ靴工場に勤め続けていたようだ。

### 3. おわりに——震災の経験を振り返って

震災時にどのような支援が必要になるかという質問に、ホアさんは震災の経験を振り返りながら、よくわからないと率直に語ってくれた。阪神淡路大震災が発生した時代は、現在と比較してインターネットもあまり普及していない時代で、考え方も大きく違うからだ。そして、震災の経験が自分の人生に及ぼした影響もないと語る。

震災後、街のあちこちで「がんばろう、神戸」というスローガンが掲げられ、メディアでも繰り返しその言葉が報道された。しかし、当時のホアさんにとって「がんばろう、神戸」という標語は自身を鼓舞してくれるものではなかったと言う。標語をみても、「がんばっているし」という印象しか持てなかったようだ。けれど、自分がそう思えるのは、震災で親しい人を亡くしてないからだ、ともホアさんは語ってくれた。

#### 付記

ホアさんのインタビューは、2015年7月8日にベトナムのハノイにて実施した。

(瀬戸徐 映里奈)

## III 家族と過ごした特別な時間：子ども時代の震災経験

### 1. はじめに

マイさん（仮名・女性・30代前半）は、両親と二人の子どもと共にベトナムのホーチミン市で生活している。マイさんの父親は、ベトナムで不動産を経営しながら、生計をたてており、マイさん自身も2014年にベトナムへ移住し、現地の日系企業に勤務している。

ハノイ出身のマイさんの両親は、10代後半でベトナムをボートで出国した。父が先に出国し、母は後をおいかけてベトナムを出国したという。二人は香港の難民キャンプで再会し、3年ほど滞在していた。マイさんはその難民キャンプで生まれた。マイさんが生まれて間もなくして、日本へ受け入れられることが決定した。渡日後、まず姫路定住促進センターで暮らしに必要な講習等をうけた後、神戸市兵庫区に移住する。その後、中央区のポートアイランドのマンションに引っ越し、生活の拠点を移すことになった。

### 2. 被災時の状況

#### 〈地震直後〉

被災時、マイさんは小学校中学年であった。ちょうど地震が起こる前日から、両親が貿易の仕事のために留守にしていたので、中学生の姉と二人きりだった。両親がいないことをいいことに、姉と「学校をずる休みしよう」と計画していたところだった。普段は別々の部屋で寝ているのだが、その日は両親の大きなベッドに姉と共にもぐりこみ、両親のいない一夜を楽しんでいた。ところが、翌朝に大きな地震が起こる。一瞬、マイさんにはなにが起こったのかわからず、誰かが爆弾を落としたのだろうかと思った。姉に「爆弾？地震？」と尋ねると、すぐさま「地震に決まってるやろ！」と返され、ようやく事態を把握することができた。学校をずる休みしようとしたから、罰があたって地震が起きてしまったんだ、という後悔の念が押し寄せてきたという。ガラスの置物が落下してフローリングがめり込むなど、家のなかもひどい散乱状態だった。

当時マイさんたちが入居していたマンションは14階建てで、マイさん家族は8階に居住していた。最初の地震から30分後くらいにドアを叩く音が聞こえた。ドアを叩いていたのは、娘の安否を心配して職場から急いで帰ってきた父だった。いつもなら玄関のドアのチェーンは開けっ放しにしているのだが、その日は両親がいないこともあり、たまたまマイさんがチェーンを掛けていたのである。マイさんの父はいくらドアを叩いても娘たちが出てこないで、扉を壊そうとしていたようだ。返事がないので、娘たち二人とも死んでしまったのではないかとひどく心配したという。マイさんは父の助けを借りて、マンションを脱出することができ、別の場所にいた母とも無事に

合流を果たした。

車で、ポートアイランドから出ようとしたが、三ノ宮へ渡る橋が徒歩とバイク以外は通行止めになっていたため、ポートアイランドに閉じ込められた状態だった。近隣の食品店にも立ち寄ったが、人がいっぱい集まっており、水や食料はすでに売り切れていた。コンビニでおにぎりなどは購入できたので、結局、震災にあった日は、ほぼ一日車の中で過ごしたという。ポートアイランドは人口島であるため、あちこちに地盤沈下が起こり、水があふれ、地面はぼこぼこの状態になっていた。原付バイクがあったので、マイさんの父はひとりで家族のために三ノ宮に渡り、食料の調達に奔走してくれたという。

### 〈被災生活から「放浪の旅」へ〉

翌日になって、水道や電気などのライフラインが途絶えていることを知った。ポートアイランドには、マイさんたちの他にもう一家族のベトナム人が住んでいた。その家族は、別のマンションの21階に住んでいた。その家族の部屋に身を寄せて、しばらく共に過ごしていた。当時幼かったマイさんには地震の怖さはあまり理解できなかったが、被災生活での不便さはよく覚えているという。その頃には給水車が到着していたので、いちいち1階まで水を汲みに行かなければならなかった。トイレで用を足すときもバケツを使って水を流さなければならぬが、水が貴重なので節約しながら使用しなければならなかった。洗髪できる回数も限られていた。1月の寒い時期だったが、灯油の調達が難しく、暖をとることも難しかったらしい。ポートアイランドの小学校も避難所となっており、多くの人が集まっていた。しかし、マイさんの家族は避難所には入浴のために一度ほどしか足を運ばず、ほとんど車か自宅で過ごしていたという。

そうして数週間が過ぎたある日、父が「日本一周しよう」と提案した。その頃には、ポートアイランドから三ノ宮へ自由に渡れるようになっていた。マイさん家族は、震災後から2～3週間かけて湯巡りをしたり、東京や埼玉に在住している知人や友人の家を訪ね回ったりした。日本には親戚がいないマイさん家族であったが、ベトナム人の知人や友人に大きく支えられていたようだ。震災という大きな出来事に直面したのにも関わらず、旅にでかけた両親のことをマイさんは「悲惨な状況下でも考えがポジティブで、すごい」と表現する。

震災から2ヶ月後によく知人たちをめぐる「放浪の旅」が終わり、両親も仕事を再開し、学校へ再び通い始めた。久しぶりに登校した学校は、地震の影響で階段が増えたように沈下しており、とても驚いたという。

### 〈父の救援活動——長田のテント村〉

「放浪の旅」を終えて神戸に戻ってきたマイさん家族であったが、震災の影響から無関係に過ごしていたわけではなかった。マイさんの父は震災で深刻な被害を受けた長田地域へ出向き、他の支援団体とも連携をとりながら被災ベトナム人の救援活動を実施していた。

両親に連れられて、マイさんもベトナム人が多く避難していた南駒栄公園に足を運んだことがあるという。救援活動というよりはベトナム人が多く集まる場所に遊びに行くという感覚だったようだ。さらに、南駒栄公園には、国際電話が無料でかけることができる電話台が2、3台設置されていたため、ベトナムにいる親類たちと連絡をとるために避難者以外の人も公園をよく訪れていた。公園には、ベトナム人以外も避難していた。両者の間にトラブルがおこると、日本語が流暢ではない父母のかわりに、幼いマイさんが喧嘩の間にはいつて通訳をさせられたこともあったという。ベトナム人は土日になると音楽をかけて騒ぐが、日本人は静かに過ごしたが。このような両者の生活習慣や考え方の違いに触れ、住み分けたほうがいいのではないかと実感したという。

## 3. おわりに——震災が教えてくれたもの

震災を経験から、電気、水、ガスの大事さがわかったとマイさんは最後に語ってくれた。現在、マイさん家族はホーチミン市に生活の拠点を移した。両親と違い、日本で生まれ育ったマイさんにとって、ベトナムへの移住は簡単に決められることではなかった。しかし、2011年に東日本大震災が発生したことで、日本での生活が安全なものでないことを再認識したという。1.17に引き続き、3.11という二つの震災を目の当たりにしたことが、日本での生活を離れるひとつの要因となっていたのだ。

## 付記

本調査は、2015年8月30日にホーチミン市にあるカフェで実施した。

(瀬戸徐 映里奈)

# IV 公園で暮らすという非日常にからみた「被災」生活

## 1. はじめに

カイさん（仮名・男性・30代前半）は、80年代前半に難民として渡日した両親のもとに生まれた。家族構成は、姉が1人、妹1人、弟が二人の7人家族で、カイさんは長男である。幼少期まで奈良に住んでいたが、親の転職をきっかけに神戸市長田区へ移住する。父は自営業、母はケミカルシューズ工場でパートとして働いている。

カイさんは、小中高時代を神戸で過ごした。子ども時代を振り返ってみても、生活で困ったことは特になかった。幼いながらに、両親に気を遣うことはなかったという。

カイさんは大学進学のため18歳から上京し、それからは家族と離れて暮らすようになる。卒業後は、日本の一般企業に就職するが、2014年にベトナムで語学留学することを決心し、ホーチミン市に移住する。現地の語学学校に通いながらベトナム語を学び、1年後にはホーチミン市の日系企業に就職した。現在も、ベトナムで暮らし続けている。

## 2. 被災時の状況

### 〈地震直後〉

被災時、カイさんは小学4年生であった。親族訪問のために初めて両親のベトナムの故郷を訪れ、日本に帰ってきたのが17日の深夜。家に帰ってようやく眠りにつけたのだが、地震にももの数時間で起こされてしまった。その日は初めての海外旅行だったこともあるせいか、自分が日本の自宅にいないような感覚が続いていた。地震が発生して、ようやく自分が日本に戻ってきたことを再認識できたという。

地震の揺れ自体はもう覚えていないとカイさんは語ってくれた。眠っているところを突然、父親に起こされた。目をあけると、父親がとても焦っている。どうしたのだろうか？と不思議に思ったが、父親にいわれるがまま、毛布を抱えて近くの小さな公園に家族と避難した。しかし、そこには長く滞在せず、近くの保育所の講堂に移動し、そこで2～3日滞在した。その間に、両親が情報収集してくれたようで、最終的に別の大きな公園（南駒栄公園）に避難することになった。

余震などが多発していたはずだが、揺れに関する記憶はないという。居住していた家の壁にヒビが入ってしまったり、タンスが倒れてしまったりなどの被害はあったが、大きな損傷があったわけではなかった。その後、役所の人が自宅をチェックしにきたが、半壊という認定をもらっただけだった。

避難先ではとても暇だったので、外を歩いたりしてまわりを散策したりもしていた。今振り返るととても不謹慎だとは感じるのだが、当時は「もう一度揺れるー」と地面に願ったりもしていたという。家の周りには焼け野原になっているところや全壊した家もなく、移動の際も安全な広い道しか通っていなかったのが、事の重大さをわかっていなかったのだ。他にも、当時の印象深い思い出として、24時間営業のはずのコンビニエンスストアのシャッターが降りていることなど、日常ではみられない街の風景に幼心にとても興奮したことを語ってくれた。

### 〈公園での被災生活〉

被災生活のなかで、困ったことはなかったという。子どもは寒さに強いからかもしれないが、凍えたという記憶もない。炊き出しもあったし、食料も平等に与えられていた。避難先の公園の炊き出しがなくなっても、他の近隣の避難所の炊き出しへ足を運べば、すぐに食料が入手できた。テレビを見ながら、配給の食料が行き渡っ

ておらず、困っている人がいるというニュースをみて大変やなあと他人事のように感じており、被災者の感覚ではなかったことを話してくれた。

公園でカイさんの家族はテントを張ったり、4tトラックの荷台にブルーシートと絨毯を敷いて、キャンピングカーのようにして、そのなかで生活していた。被災生活はカイさんにとって、苦痛の伴うものでも退屈なものでもなく「面白い」ものだった。子どもたちと鬼ごっこやハンカチおとしをして遊んでくれる学生のボランティアもよく来ていた。また、カイさんは公園の生活に自宅からゲームボーイを持ち込み、ひとりよく遊んでいた。また、いろんな救援物資がくるのも興味津々だった。水のいらぬシャンプーを配っているおじさんのところへいき、興味本位だけでももらうこともあった。公園にたまにくるボランティアの人がリストを持っていて、そのリストから欲しいものを選ぶと次の日には持ってきてくれた。電池がなくなっても、救援物資があったのですぐ補充することができ、電池切れで困ることもなかった。特に印象深い救援物資は、トラックに山ほど積まれたチョコレートだった。ある芸能事務所がファンから届いたチョコレートを寄付してくれたものだった。

学校が再開しても、しばらくは公園から学校に通っていた。友人が公園に遊びにくることもあった。学校に行けば行っただけで、救援物資として各地から送られてきた大量の文房具があった。

それだけの支援をうけていた分、学校が始まると生徒たちは通常の授業よりも支援に対する御礼や大人たちを励ますための様々な活動に小学生としてかき出されることになった。上の学年が作った震災に関する歌を練習し、仮設住宅の入居者を学校に招いて披露したり、その歌をテープに吹き込み仮設住宅の人に配ったりすることもあった。また、救援物資を送ってくれた人に感謝の意を表すために、感謝の絵も描いた。当時は先生に言われたらやらなアカンと思っていましたが、今考えると自分たち子どもの意志もそっちのけで大人たちにいろいろと使われたのではないかと疑問も感じているようだ。

「まったく皆様の力にはなってなかった。ただ、遊んでいただけだった。いま思えば、それが自分たちの役割だったのではないかと。子どもが遊んでいるというのは日常の光景だから。大人たちはそれをみることで安心できたんじゃないかと思う。」と、公園での被災生活を振り返り、カイさんはそう語ってくれた。

### 3. おわりに——3.11 を経験して

カイさんは震災の経験がその後の自身の生活に影響を与えているとは思わないという。まわりで人が亡くなったわけでもなかった。幸いにも当時通っていた小学校の在校生やその家族に死者はなかった。大学卒業後、就職して東京で生活していたときに、2011年の東日本大震災を経験した。そのとき、まわりの人に比べると過敏に反応していた自分に気付いた。何も覚えていないと返答したが、実は体は覚えているのではないかと感じたようだ。揺れた直後の記憶がないのも、実はつらい記憶だから封じたのかもしれないと、今回のインタビューを受けるにあたり思い直したことを伝えてくれた。

自身の生活に震災が影響を与えているわけではないといいながら、最後にカイさんは東日本大震災が発生したあと、被災地の一つである宮城県の女川を訪れたことを語った。ボランティアは嫌いだが、いろんなことを経験したいという気持ちはあった。できることがあればしたいと思っていたが、現地に行ってみると自分にできることは何もなかったという。結局、自分にできることはこの地域にお金を落とすことだと思い、様々なところを観光しながら一週間ほど滞在した。やっぱりあのとき宮城を訪れたのは、自分に被災した経験があったからかもしれないと、カイさんはインタビューの最後を締めくくった。

### 付記

本調査は、2015年8月28日ホーチミン市の和食レストランで実施した。

(瀬戸徐 映里奈)



写真5 鷹取東地区（1995年撮影）

提供：神戸市



写真6 復興した鷹取東地区（1999年撮影）

提供：神戸市

### 1. はじめに

阪神・淡路大震災から16年後の2011年3月11日。東北の太平洋側に巨大な津波を伴った東日本大震災が起こった。ベトナム難民の集住地区がある神奈川県も、震度4の揺れが襲い、多くのベトナム難民も地震を経験した。ただし神奈川県は、地震による大きな被害はなかった。集住地区のある県営団地では、揺れを恐れた高層階の住民が一夜だけコミュニティに避難したものの、それ以上の被害はなかった。もちろん、原発事故による放射線被害を恐れた外国籍住民の帰国ラッシュは、震災後しばらく続くことにはなかった。その後、神奈川県は「被災地」ではなく、「避難者」を一時的に受け入れる場所となっていった。

チャンさん（仮名）は、30代前半の女性で、小学生の時に来日した。奇しくも阪神・淡路大震災の起こった1995年に来日していることになる。チャンさんは大学を卒業後、集住地域で通訳として活躍することになった。

### 2. 震災当日と支援活動への参加

#### 〈震災当日とその直後〉

東日本大震災の当日は、集住地域の事務所で生活相談をしている最中だった。かなり大きく、それに長い時間の揺れだった。事務所の棚などが「ガタガタ」と揺れてきしむ音が聞こえるくらいの揺れで、生活相談に来ていたベトナム女性と「怖いね」と言っていたのを覚えている。

揺れが収まったあとに外に出てみると、団地で一番高い高層棟の下の広場に、高層階から出てきた人たちが何人もいた。まだ寒さが残る3月で、コートを着ていても外で震える中国帰国者のおばあさんもいた。知り合いのベトナム女性は「うちの中のもの全部割れちゃった！」とひとしきり嘆いた。高い階ほど、揺れがひどかったようで、慌てて外に飛び出してきたのだが、「あ、パスポートがない！」と再び慌てて部屋に帰っていった。ちょうどパートに出掛けていたカンボジア人のお母さんは、泣きながら子どもを預けていた保育園に向かっていった。

チャンさんの仕事は、こうした人たちの間を回りながらベトナム語で話しかけ、また余震を恐れて自室に帰らない人たちのために、コミュニティハウスに一時避難所を作るよう外国人支援のNPOの代表と一緒に駆け回ることだった。また、当然のことながら動かなくなったエレベーターに、「動かない」というベトナム語を書いて貼ってまわっていた。週明けも生活相談に出ていたが、ここで多くの人が母国への一時帰国を希望しており、チャンさんはその手配に任せてこ舞いになっていた。このような状況であっても通訳をてきぱきとこなしていた。

#### 〈支援活動への参加〉

東日本大震災から1～2ヶ月経つと、東北での震災被害は、長期化の様子を見せていた。津波の行方不明者は続々と増え、また原発事故からの避難者が関東にもやってきていた。

そのような時に「何かお手伝いがしたい」と思っていたチャンさんは、近くで小学生のために日本語を教える活動をしていた別のベトナム難民の女性Nさんから、支援活動の話聞いたという。その支援活動は、日本での生活が長かったNさんとその弟が言い出して始まった活動で、ベトナム難民の人が中心となって、川崎市にあった原発事故の避難者のための避難所で、炊き出しをおこなったという。フォーに揚げ春巻きなどを、その場で作ってふるまったそうだ。チャンさんは、この事務所で知り合ったGさんと二人でその活動に参加した。チャンさんもGさんも難民である自分たちが困った時に受け入れてくれて恩恵を受けてきた日本に何かしたいと思っていたので活動に参加したそうだが、それは他のベトナム難民の参加者もみんなそうだったという。特に若い人が多く、10代の人も多数いたようだ。どの人もみんな何かできるかを考えて自発的に集まり、すごく熱心だったと感じたそうだ。

チャンさんはその活動で、多くの被災者と話ができたことが印象に残っているという。自分たちの料理も喜んでくれたものの、避難してきたお年寄りが、住み慣れたところや、家族、そしてコミュニティの人たちと離れ離れになっ

てしまったことを寂しがっていたそうだ。チャンさんと G さんは、行ってよかったねと話しながら帰途についた。

### 〈ベトナム難民の多様な支援活動〉

チャンさんが参加した活動以外にも、多くのベトナム難民の有志の人たちが、震災の支援活動に携わっていた。チャンさんと筆者が生活相談を実施している事務所の建物の1階には、ベトナム難民だった人が経営するベトナム物産店とベトナムレストランがあるが、どちらも被災地や神奈川県内の避難所で炊き出しをおこなっていた。マイクバスを貸し切って、被災地に行っているという話も耳にした。ベトナム難民が多数通う地元のカトリック教会が主催となって実施した炊き出しもあったようだ。

また、チャンさんによると、ベトナム難民の有志が、ベトナム本国から僧侶を呼んで、被災地に連れて行き、慰霊のためのお経を読んでもらうこともあったようだ。亡くなった方が安らかに天国に行けるように祈祷をしたそうだ。それには多くの信徒が同行した。

「ちなみに」と言ってチャンさんが教えてくれたのは、身近な志の話だった。震災直後は帰国ラッシュだったが、そのようななかにあってもベトナム人から「寄付を受け付けるところを教えてください」と相談が何件もあったそうだ。

### 3. 震災の支援活動をとおして

「震災のことなんて、もう随分前だよねえ」と言いながら話してくれたチャンさん。彼女は今も集住地域に住んで、通訳や日本語教室の手伝いなどをしていて、ベトナム人が抱える問題を多数見てきている。日々の支援活動は、当然良いことばかりではなく、ベトナム人の負の側面も見えてきて疲れることもあるとのことだ。そのようななか、熱心に「人のために役に立ちたい」と活動している同胞に出会えたことは、チャンさんにとっても意味のあることだったのではないだろうか。

(長谷部 美佳)

1995年1月17日の阪神淡路大震災から20年が経過した「いま」だからこそ、ベトナム難民たちの震災経験にもう一度耳を傾け、記録することを目的として本事業は2015年5月より始められた。そして、この報告書を作成中に、21回目の1月17日が過ぎ去っていった。震災関連の催しのなかには終了・縮小したものも多く、メディアは参加者が減少したこと寂しく報じた。その一方で、21年目だからこそ次世代へ被災経験と復興までの過程を語り継ぐための新たなイベントも催された。20年目を契機として、阪神・淡路大震災の経験をめぐる記憶の継承は新たな局面を迎えつつあるようだ。そのなかで、外国人たちに被災経験はどのように記録され、語られてきたのだろうか。戦前から多くの外国人たちが生活する国際都市として名高い神戸。しかしながら、そこに暮らす外国人たちがなぜ日本に渡ったのか、どのように暮らしているのかについて、知られることは少ない。それは、本報告書がとりあげたベトナム難民についても同様であろう。阪神淡路大震災が発生したあと、被災したベトナム人が南駒栄公園に集まり、長期的に生活していたことは、当時多くメディアがとりあげ、記録し、報道していた事実である。しかし、その公園にいた人々がどのような経緯でそこに集まっていたのか、どのような感情を抱えながら、震災を乗り越えてきたのかについては十分に検討されているとは言い難い。震災によって、多くのベトナム難民が見知らぬ異国の地でゼロから築いてきた生活基盤は、大きな打撃をうけた。それぞれの語りからは、そうした苦境に置かれたのにもかかわらず、遅しなく、時にしたたかに乗り越えていく一世たちの姿を伺い知ることができる。故郷で戦争や生活苦を乗り越え、難民としてベトナムを脱出するという大きな体験は、震災という非常事態に対して対処の手段を見出そうとする底力と繋がっているのかもしれない。

本報告書のベトナム難民の語りたちは、被災者として眼差されるベトナム難民が実に多様な人びとであることを教えてくれる。たとえば、多数のベトナム人がテントを張って生活していた「南駒栄公園」には、被害が少ない近隣から同胞の支援のために駆けつけた人、友人に会うために遊びに出かけただけの人も出入りをしており、すべての人が避難者であったわけではなかった。また、ベトナムの故郷へ一時的に避難した人もいる。だが、その故郷への帰国は最初から保障されてきたものではない。難民が、ベトナム本国への帰国が活発になるのは、本国政府が政策転換した90年頃からである。だが、帰国したとしても、本国社会において在外ベトナム人の活動は大きく制限されていた。ベトナムに避難が可能であったとしても、多くの人たちにとって帰らねばならない場所は、家があり、職場があり、学校がある日本の神戸だったのである。そう考えると、人々の語りにはしばしば登場する避難先となった「南駒栄公園」のテント村は、震災によってライフラインが閉ざされたなかで、ベトナム人たちがつくりあげたもう一つの新たな「故郷」ともいえるものだったのではないだろうか。

2010年代にはいり、日本とベトナムの社会も日越関係も大きく変容した。被災当時、幼かった人々のなかには、両親の故郷であるベトナムへ生活の拠点をうつした人もいる。日本で育った二世たちは、日本で得た経験を活かしながら、ベトナムの日系企業で活躍されている。二世たちにとって、震災の経験とは人生のなかで幼い頃にわずかな記憶であったかもしれない。それでも、幼い頃の記憶をたどり、言葉を紡いでくださった。そして、それぞれの語りから、2011年3月11日に発生した東日本大震災が大きな不安感を与えていたことも改めて感じさせられた。インタビューを通して、民族が異なるといえども、同時代を生きているという当たり前の事実を改めて認識する機会となった。本報告書が、それぞれの経験を記録し、「わたしたち」の間に差異を生じさせているものが何なのかということのを再考するうえで、少しでも力になれば幸甚である。

ご多忙な日常にずかずかと上がり込み、20年前の記憶を掘り起こそうとする研究者や大学院生たちは、無作法な「お邪魔虫」であっただろう。それでも、本事業にご理解くださり、インタビューにご協力くださったすべての方に心より感謝を申し上げます。

(瀬戸徐 映里奈)

## 執筆者プロフィール

---

### 野上 恵美(のがみ えみ)

1976年生まれ。ベトナム夢 KOBE 共同代表／神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程。専門は文化人類学。主な論文に「就労現場におけるベトナム難民の受け入れと町工場が果たした役割—兵庫県姫路高木・神戸市長田を事例に」（難民研究ジャーナル編、『難民研究ジャーナル』4号、pp.106-121、株式会社現代人文社、瀬戸徐映里奈との共著論文）など。日本に居住しているベトナム難民の生活世界について研究している。

### 瀬戸 徐映里奈(せと そ えりな)

1986年、兵庫県生まれ。京都大学大学院農学研究科博士後期課程。専門は地域研究、移民・難民研究、社会学。主な著書に“Everyday Practice of Immigrant Vietnamese Women in Japan in Obtaining Ingredients for the Food of Their Homeland”(Noriko Ijichi, Atsufumi Kato and Ryoko Sakurada Ed, Rethinking Representation of Asian Women: Changes, Continuity and Everyday Life. pp.69-85. Palgrave Macmillan, 2015) など。兵庫県を中心にベトナム難民の生活や、他の地域住民との関わり、ベトナム本国社会と難民の繋がりについて研究している。

### 久保 忠行(くぼ ただゆき)

大妻女子大学比較文化学部専任講師、専門は文化人類学、地域研究（東南アジア）、移民・難民研究。主な著作に『難民の人類学—タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住』（清水弘文堂書房、2014年）など。タイの難民キャンプから第三国へ再定住するビルマ（ミャンマー）難民の移動と定住課程を人類学の視点から研究している。

### 白波瀬 達也(しらはせ たつや)

1979年、京都府生まれ。関西学院大学社会学部准教授。専門分野は、宗教社会学、福祉社会学。著作に、『宗教の社会貢献を問い直す—ホームレス支援の現場から』（ナカニシヤ出版、2015年）、「浜松市におけるベトナム系住民の定住化」（『コリアンコミュニティ研究』第4号、2013年）。

### 荻野 剛史(おぎの たかひと)

1973年、埼玉県生まれ。横須賀椿園在宅介護支援センター、淑徳大学、愛知みずほ大学などを経て、現在は東洋大学社会学部社会福祉学科准教授。専門分野は、ソーシャルワーク、特に滞日難民に対するソーシャルワーク。著作に、『「ベトナム難民」の「定住化」プロセス—「ベトナム難民」と「重要な他者」とのかかわりに焦点化して』（明石書店、2013年）、「インドシナ難民の生活問題解消に向けた地域支援者によるサポートの特性」（『社会福祉学』第55巻1号、2014年）、「わが国における難民受入れと公的支援の変遷」（『社会福祉学』第46巻3号、2006年）などがある。

## 高橋 典史(たかはし のりひと)

---

1979年、東京都生まれ。東洋大学社会学部社会文化システム学科准教授。専門は宗教社会学。主な著書に『移民、宗教、故国—近現代ハワイにおける日系宗教の経験』（ハーベスト社、2014年）、『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本』（共編著、勁草書房、2012年）など。日本とハワイにおける宗教と難民や移民との関わりについて研究している。

## 瀧尻 明子(たきじり はるこ)

---

大阪市立大学医学部看護学科講師、専門は精神看護学、国際看護学。主な研究分野は在日外国人の健康課題やメンタルヘルス。著書『国際保健・看護基礎論ワークブック：Chapter II -4. 多文化共生、Chapter III -3. メンタルヘルス』（監修 田代順子、ピラールプレス、2016）など。

## 長谷部 美佳(はせべ みか)

---

1970年生まれ。東京外国語大学特任講師。専門は社会学。博士論文をインドシナ難民の配偶者に焦点を当て執筆。タイトルは『インドシナ難民による配偶者呼び寄せという形の結婚移民の考察：「結婚」移民と「労働」移民の二項対立を超えて』。その他「インドシナ難民家族の高校進学と支援者の役割」（明石書店、2013年、川村千鶴子編著第5章）、「結婚移民に対する移民ネットワークと移民コミュニティの役割—インドシナ難民の配偶者の事例から」（2010年）など。

## 付記

本報告書は、2015年度公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金の助成をうけて、ベトナム夢 KOBE によって出版されたものである。

発行日： 2016年3月

編集： ベトナム夢 KOBE

著者： 瀬戸徐映里奈・久保忠行・白波瀬達也・荻野剛史  
高橋典史・瀧尻明子・長谷部美佳・野上恵美